

# 祝言・葬式の〈つきあい〉を通してみた シンルイの継続性とその限界

佐 藤 信 行

岡部保博 青木由紀子

昭和43年7月に佐藤を中心とする9名によって、第1回の調査が行われ、以来同年9月、翌年の4月と6月、昭和45年の8月と10月の6回にわたって行われた。その間、参加メンバーに変動があった。今回の報告は第1回の一般調査及び昭和45年8月、10月の調査結果にもとづいている。本稿は上記3名によるが、ここに名を記さない研究メンバーの協力を無視できない。なお、本稿の調査地である下村の方々は、極めて多忙な農事の只中であって、われわれのために心よく時間をさき、協力してくださった。本稿が下村の方々の温情へのささやかな応えになっていれば幸いである。また唐橋町長、公民館長の小沢、佐藤の両氏、町役場の方々の好意と援助にも深く感謝したい。

## 目 次

はじめに

I 村落の概要

II 問題の所在と方法について

III 祝言のつきあい

IV 葬式のつきあい

§ 1 儀礼のあらまし

§ 2 つきあいの分析

V ムラシンルイ

VI 要約と結論

はじめに

わが国のシンルイは、構成上から恒常的集団にはなりえず、主に成員の

死にもとづく世代の交替とともにつきあいが薄くなり、ついには、シンルイとして意識されなくなるという一側面をもつ。当調査地——福島県耶麻郡山都町下村部落——においても、＜ホカムラ<sup>(1)</sup>＞の＜シンルイ＞に関してはそのことがあてはまる。すなわち、＜フルイシンルイ＞という段階を経て、シンルイとしての関係は切れる。

ところが、＜ムラウチ<sup>(1)</sup>＞の場合は、たとえ古くなっても＜ムラシンルイ＞として、幾世代にもわたって安定した＜つきあい＞をするのである。＜ムラシンルイ＞はどんな関係を契機に＜つきあい＞をはじめ、代々つきあうのだろうか。下村の人々が個人として、家族の一員として、ムラの内外の諸個人・家族と社会関係をとり結ぶ中で、＜ムラシンルイ＞との＜つきあい＞はどのように位置づけられ意味をもっているのだろうか。本稿はそのような問題を解明するための、予備的な考察である。

本稿に用いた系図には以下の記号を使用する。

——；太い実線は特に注目すべき家筋を示す時に用いる。

—・—・—；特に、ホカムラの関係とムラウチの関係を区別したい時に、ホカムラの関係に用いる。

△；婿養子を意味する。

△, ●；養子を意味する。

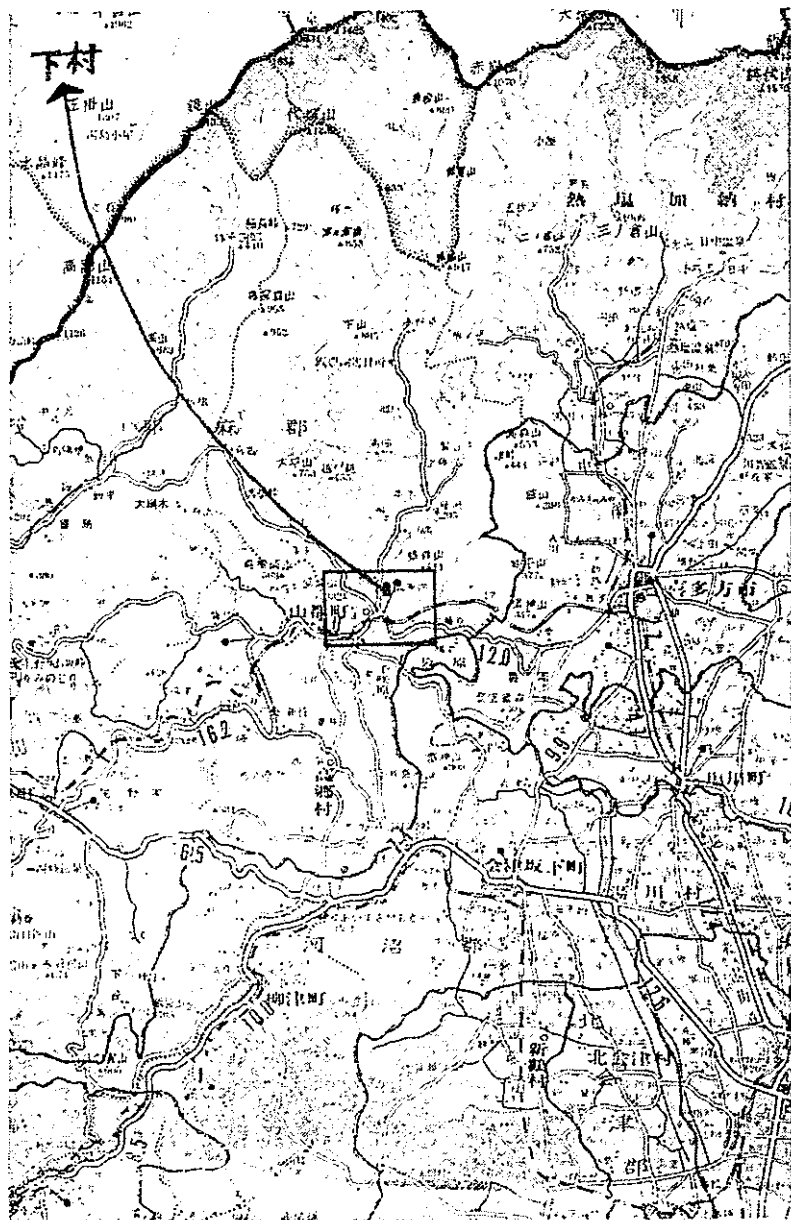
↑；家筋をさかのぼりうる事を示す。

†；分出。

✱；分家。

(1) ムラウチというときのムラとは、下村部落をさす。ホカムラというのは下村の周辺部落であるが、それがどの範囲にまで拡大して用いられる語であるかは不明である。およそ、山都町乃至山三郷(16頁参照)内の各部落はホカムラであろうと思われる。

## I 村落の概要



郡山で東北本線と別れて、磐越西線を西へと旅した人は、その車窓の変<sup>(1)</sup>化に気付くだろう。汽車が走り始めるとすぐに両側の風景は、冬の雪の深さを思わせる山間地帯へとうつり変わっているのである。猪苗代湖を左に、磐梯山を右手にその麓を廻って会津盆地へぬける。会津若松から急行で喜多方まで一駅、そこで鈍行に乗りかえ、一駅いった所が山都である。喜多方と山都の間にはちょっとした峠がある。かつて旅人はそこで汗を流したに違いない。今は、その下をトンネルが通っている。トンネルを抜けると、飯豊の山に連なる山なみが、遠くに続いているのが目に入る。

当地が「山都」という名を冠せられているのもゆえない事ではない。喜多方から西の耶麻郡の西部地方は、旧幕時代、木曾組、大谷組、吉田組の3つの郷から成り、山三郷といわれたほどだった。現在の山都町は、かつての木曾組とはほぼ一致する。江戸末期においては、山都町堂山部落のM家が、木曾組の郷頭をつとめ、同時に山三郷の代表格の郷頭としても認められていたという。郷頭の下には、各部落毎にオヤカツァマ（肝煎）があり、いわゆる村方の仕事をとりしきっていた。

雪の深い山の麓の里人の心の中には、「雪形」の伝承が今でも生き続けているらしい。ここ山都も例外ではない。飯豊山に、腰の曲った老人の姿をした雪形が見えるという。山を仰ぎみながら、「種まきじいさま、まだ出ねえなあ」と播種期を待ったという話や、「サツキ（田植え）の頃、雪の形が馬にみえる」といって腰を伸ばして見てみると語る村人もいた。そして実った稲の穂は、出るとまず飯豊山の方へ頭を垂れたという。山都の稲は、飯豊山—メシユタカナヤマ—の雪溶け水で成育するのである。

山形県、新潟県、福島県にまたがる飯豊連峰から山都町を南北に一筋、一の戸川が下る。耕地面積6.9%に比して山林は実に82%を占める山都町。その中でも比較的平野部に隣接した地帯に下村はある。調査を開始した昭和43年当時、総戸数22戸うち専業農家4戸、第1次兼業農家6戸、第2次兼業農家7戸、非農家は5戸であった。現在は農家1戸が離村している。1戸あての水田面積は平均7反位で平均収穫量は反あたり約7.5俵で



ある。米の生産に加えて、タバコ、アスパラ、トマトの商品作物の栽培にも取り組んでいる農家も何軒かある。その他に養蚕を行う家もあるが、20才から29才の青年層が都会へ流出しているため、労働力の不足が目立つ。昭和43年には、総人口96名うち男46名である。年齢層別人口構成は、10才～19才が27名と一番多く、続いて40才～49才が16名、60～69才が15名となっている。

非農家は、屋根葺きの職についたり勤めに出たりしているが、第2次兼業農家の中にも手に職を持っている人や、喜多方・会津若松に勤めに出ている人が多い。

しかし非農家が増えたのは戦後の傾向である。明治にムラの共有地を記名共有にした時は12戸のムラであった。そのうち9戸が「縁故住民」として残っている。

ムラは、ほぼ真中で上組カミグミと下組シモグミに分かれている。上下の何らかの区別はあったらしいが、戦争中の隣組以来分かれたともいわれる。現在は互助組織のひとつとなっている。

ムラのつきあい(2)や、ムラのカカリ(3)の事等を決める区会は、各家から一人ずつ出席して毎年1月10日前後に行われる。これが定例区会で「春会」と呼ばれ、区長の家で開かれる。雪深い山都の初春に、出稼ぎ先から還ってきた人々が揃って顔を合わせる機会でもある。

さて、次に当報告を進めるために参考として、下村の内婚率をあげておきたい。江戸末期から現在までの当主の婚姻に限ってみると、79例あった婚姻のうち村内婚は12例(15%)である。(現住家系のみ集計。)

婚姻に関してもうひとつ指摘しておかなければならないのは、当地方においては「長子相続」つまり男女を問わずに長子が跡をとる慣行が一般的であったという点である。明治31年の旧民法改正に伴い、長男相続へと移行し、現在では昔話になってしまった。

下村では、「実家」という言葉が嫁や婿の生家を指すのみでなく、次三男が一本立ちした場合でもやはり生家は「実家」と呼ばれる。又、祝言に

においては花嫁花婿の区別なく「オヒロメ」と称して、相手方のムラをまわる慣習がある。こうした慣行の背後には性に関するわけへだてというものが見られない。その事は長子相続となんらかの関係があるのではないかと思われる。

#### イケダイならびに本分家関係

柳田国男は、『葬送習俗語彙』<sup>(4)</sup>の中でノメシという言葉に触れて次のように記している。

ノメシの語は、既に愛知県と青森県との例をあげておいたが、新潟県にもこの語があり矢張り野に持っていく飯である。東川村ではデサウ（葬式）の際に、分家の葬ひなら本家、本家の場合なら一の分家の主人が羽織袴で米をとぎ、ヘラと共に苞に入れて葬列に捧持し、後で墓へ埋めるものである。人によると野飯そのものをイケダイ（一家代）といひ、それを供へる人をイケダイモチといふ。

柳田国男が報告した新潟県東蒲原郡東川村の葬送の慣行と類似する慣行が当地にも見出される。野送りの時に同様の苞状の物を持って葬列につく者は、イケダイと呼ばれる。例えば、下村より西へ小一時間歩いた所にある堂山部落においては、「本家が分家のイケダイを持つ」又は「うちのイケダイは誰々が持つ」といって、葬式の際のある役割としての〈イケダイ〉の意味が強調される。そしてその役割は本家の機能のひとつとして考えられている。それで野送りにおいて〈イケダイ〉を持つ家は、祝言では本家として「大世話人」となる。香典にしても本家格の〈つきあい〉をする。

ところが、下村では、〈イケダイ〉という語は大分異なった意味を持っている。「あの家は、うちのイケダイだ」といい、〈イケダイ〉は特定の<sup>(5)</sup>家との関係を表わす概念になっている。「イケダイは、チチマツダイ。一番大切なムラシンルイ」といい、超世代的につきあうべき〈ムラシンルイ〉と考えられている。野送りの際は、〈イケダイ〉の家の当主がイケダイとなるが、祝言の際には必ずしも「大世話人」とならない。また香典の

〈つきあい〉も〈ムラシソルイ〉並みである。<sup>(6)</sup>では、〈イケダイ〉は本家とは関係がないのかといえば、そうでもない。例えば、本・分家の間でイケダイ同士の例もある。「イケダイは本家に頼む」「本家と分家の間でズイッコ（結）になってる」と、ムラビトは語る。ところが、前述したように〈イケダイ〉関係を結ぶ家の間に、堂山で見られたような本分家間の慣行<sup>(7)</sup>は殆ど見出せないのである。現在〈イケダイ〉仲である家のうち5例は

どのような（系譜）関係のもとで〈イケダイ〉仲となったのかわからない。うち4例は「本家・分家」といわれているが、下村の本分家の名称であるカッテ、インキョと呼ばれる例は1例のみである。又、明治になってから「分家」をした家が、事情があって「本家」に〈イケダイ〉を頼めずに、婿養子を貰った家と〈イケダイ〉仲となり、その家を「作り本家」と称している。（S<sub>3</sub>家）〈イケダイ〉になっているから本分家だという発想が、ここにみられる。上の4例も後年になって、〈イケダイ〉故に本分家だといわれるようになったとも考えられる。

なお下村においては、「本家・分家」の用語法が曖昧であり個人差も大きいので、「本家・分家」という言葉の与えられる関係を、ここで整理しておく。（a）先程あげた、系譜関係が全く不明であるが〈イケダイ〉同士である家……4例。（b）明治以降戦後までの間に分家した例……4例。いずれも家又は土地の贈与を伴い、うち3例に「カッテ」、「インキョ」の本分家名称が与えられている。（c）次三男が、家や土地の贈与を受けずに一本立ちして〈一家を創設〉した場合。

以上の3つの場合が考えられる。しかし確実にどのムラビトも本分家と認めるのは、（b）の4例のみである。本稿においては、（c）のような関係を、分出したと表現し、（a）、（b）には「分家」したという表現を用いるが、問題のある場合は特記してある。参考までに、（a）、（b）、（c）にあてはまる関係をあげておく。76頁の系図と照らしてほしい。

（a） S<sub>1</sub>→S<sub>4</sub>, T<sub>1</sub>→N, T<sub>1</sub>→T<sub>2</sub>, O<sub>3</sub>→O<sub>2</sub>

（b） S<sub>1</sub>→S<sub>2</sub>, A<sub>1</sub>→A<sub>2</sub>, O<sub>2</sub>→O<sub>1</sub>, S<sub>4</sub>→S<sub>5</sub>



(c)  $S_3 \longrightarrow S_6$ ,  $O_4 \longrightarrow H$ ,  $S_4 \longrightarrow S_7$ ,  $S_4 \longrightarrow S_8$

注

- (1) 明治43年に開通した。
- (2) 御産の見舞い、病気見舞い、香典の額等「ムラ見舞」に関する相場を検討する。又それ等に対する御返しの手を決める。
- (3) 部落費、詳しくは 58 頁参照。
- (4) 柳田国男『葬送習俗語彙』民間伝承の会、1937, p. 95
- (5) 本稿で家という表現を用いるのは、ムラ人が「オライ(自分のうち)」等という時の、「イ」を言いかえたにすぎない。従って household であるともいえる。超代的な観念を含まない点に注意してほしい。
- (6) 詳しくは IV 章 § 2, 見舞額の項 58 頁参照。
- (7) 堂山部落もけっして本分家慣行が顕著なムラとはいえない。むしろ殆ど見られないといった方がよいかも知れない。しかし、祝言、野送りの儀礼に限ってみれば、本家が本家として又は分家が分家として果たすべき役割が、見出されるのである。

## II 問題の所在と方法について

〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉は、世代の交替とともに、〈フルク〉になってゆくという。〈ムラシンルイ〉は、「古くならない」とも、「古くなってもつきあいはかわらない」ともいわれる。下村の人々は、〈ムラウチ〉と〈ホカムラ〉のシンルイの〈つきあい〉の持続性の差について、どのように感じているのか、そしてわれわれに対してどのように表現するのだろうか。

下村の  $O_4$ T 老の祖父は、隣村上林部落の Or 家より、子供のいなかった  $O_4$  家の跡をとるために養子にきた。ムラ人にとって、たとえ隣部落であっても、〈ホカムラ〉であることにはちがいない。祖父の後添も〈ホカムラ〉から嫁に來た者である。山羊のカイバを切りながら 74 才になる  $O_4$ T 老は、亡母の初七日の法事(「一七忌日の法事」)に招いたシンルイの中から、〈フルイシンルイ〉について次のように語ってくれた。

「後家バアサマの來たうち(祖父の後添の実家)はフルイシンルイだ。



家にとっての〈フルイシンルイ〉は、息子の代を中心とした距離で測られている。O<sub>4</sub>T のイトコにあたる Si は、O<sub>4</sub>T の代からみれば〈フルク〉はないが、一世代下の O<sub>4</sub>K からみたときには〈フルク〉なるのである。<sup>(2)</sup>

そこで、シンルイ乃至親族の距離を表現するのに用いる村言葉の〈マワッ〉ているについて尋ねてみた。

「イトコの子供の代になるとマタイトコで、マワッているってことになかな。おれと O<sub>2</sub>F なんかは二度位 マワリマワッてるべえ。ホカムラならば、とっくにシンルイをやめてもいい。ムラウチだし（しかも一軒置いた前の家だから）、ムラシンルイやめられねえ。でも、いざ物事となると——オラうちはマワったから……——となるわけさ。オラうちから HT がシntaxに出たべ、オラのところで物事あれば、HT が O<sub>2</sub>F より先になる。」

O<sub>4</sub>T を中心にして考えれば、〈マワッ〉た関係とは、父方母方双方のイトコの子供の代からの関係をいう。加えれば、祖父母の繋りの〈フルイシンルイ〉も〈マワッ〉ている。そして、〈マワル〉頃になると、そろそろシンルイづきあいは、年寄の葬式や法事位に限定され、それが済むとやめるようになる。これが〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉とのつきあいである。

一方、〈ムラシンルイ〉は「ムラウチはフルクなんねえ」「マワッてもつきあいはやめらんねえ」といわれる。先の O<sub>4</sub>T の言葉から読みとれるように、ひとたび〈マワレ〉ばいわば「一段下がった」つきあいとなり、それ以後は、世代の交替が重なったとしても安定したつきあいを継続して行うのである。その実態については、後に結婚・死亡における〈つきあい〉の記述を通じて知ることになるだろう。

このように、〈ムラシンルイ〉はたとえ「一段下がった」としても、安定したつきあいを継続する。そこに「ムラシンルイの（ホカムラのシンルイに比較しての）特殊性がある」のだと一人のムラ人はいう。特殊性を解明する視点を、われわれはどこに置いたらいいのだろうか。まず、〈ムラシンルイ〉関係の発生の契機をみてみよう。

ムラ人は、＜ムラシンルイ＞であることの根拠を、＜エングミ＞があった、ないしはあることに置いているように思われる。たとえばA家の息子aと、B家の娘bが結婚してC家を創設したとする。この場合A、B、Cともに＜ムラウチ＞の家だとする。これを部落内婚の事実としてとりあげ、記述する際には、A—B家の間で縁組があったとしてよいだろう。下村においても、はっきりした区ぎりはないが、およそ、a、bどちらかが生きている間位は、A—B家の縁組でC家ができたと表現する。ところが次の世代になると、＜エングミ＞のあった家は、A—C家又は（或いはかつ）B—C家となり、決してA—B家とはいわなくなる。このようにエングミという語が指示する関係が、世代の交替に伴って変化するに従い、シンルイとしてのつきあいをする相手も変化してくる。すなわち何世代にもわたってつきあう＜ムラシンルイ＞は、A—C及びB—Cである。

一方でムラ人は、「ムラシンルイであるのはエングミがあったからだ」と、その発生を根拠づける。たしかに、今生きているムラ人自身が祝言の場に参与して村内の縁組を承認した場合もある。又、亡くなった年寄から聞いて知った、村内の縁組もあるだろう。しかし、「どうしてあそこがムラシンルイかわからない」という場合もある。その時は、逆に、「今ムラシンルイであるのは、エングミがあったはずだ」ということになる。

I章、イケダイならびに本分家関係（19頁）の項で、系譜関係の不明な＜イケダイ＞が5例あることは述べた。これに関しては、「エングミがあったはずだ」と言われることは殆んどなく、むしろ「イケダイだから、本家・分家になっているのではないだろうか」と説明される。

＜エングミ＞でも本家・分家でも説明できない＜ムラシンルイ＞もある。「タノマレシンルイ」と呼ばれるのがそれである。村外からの移住戸が、村内の家に厄介になっ場合（たとえば小屋を借りて住むなど）、移住戸は某々の家に「ワラジをぬいだ」といわれ、世話をした方の家を「ワラジヌギバ」という。移住戸にとって、村内に血縁、姻戚関係にある者がいないときは、まず、ワラジヌギバにシンルイになってもらうという。下村では、そのようなタノマレシンルイの例が一例ある。又、シンルイの少ない家では、世話になった、世話を

したということでタノマレシンルイになることもある。〈ムラシンルイ〉といっても、タノマレシンルイは、世代を超えたつきあいをするべきだという規範が弱い。頼んだ方から「やめっこにしよう」といえばつきあわなくなるといふ。

仕事関係（農業以外の、たとえば屋根職人）で世話になったから〈ムラシンルイ〉であるという例もみられた。然し、これは、当事者が不在になればつきあいは自然になくなるという。

イケダイ、タノマレシンルイ、仕事関係を除くと、現在下村でお互いに〈ムラシンルイ〉であるといっている間柄で、系譜関係の不明な例は1例である。このような例に関して、先の「ムラシンルイだからエングミあったはずだ」という表現が用いられるのである。また、年寄は系譜関係を知っているが、若い世代は知らない場合もある。その時も「エングミあったんではねえべか」といわれる。

さて、ふたたび、〈ムラシンルイ〉の特殊性を解明する視点のおき方に話を戻すことにする。すなわち、〈エングミ〉、〈ムラシンルイ〉という概念が循環して、互いの根拠づけになっていない、という事について見てきた。そこで、ムラ人は、〈つきあい〉という語を持ち出してくる。先の例で、「どうしてA—B家の縁組とはいわないのか」と尋ねると「そりゃ、A—Bのつきあいが<sup>(3)</sup>ないから」とこたえる。〈ムラシンルイ〉の、ムラ人による意味づけを探ろうとするには、この〈つきあい〉というのが重要な鍵をにぎっているように思われる。われわれの調査に関心を示していた隣の上林部落の一人の老人は次のように語る。

「下村の人達はあんた達がきてから、色々と昔のことを考えるようになったんだ。最初のときは、急に、どうして自分のうちと、あそこのうちがムラシンルイなのか、などと聞かれても、普段考えて、記憶しておいたことではないのだから、答えようがなかった。でも今度は、少しは思い出しているはずだから、前よりはすらすらと答えられるでしょう。」

この言葉は、〈ムラシンルイ〉を解明する糸口として、系譜意識から見るのではなく〈つきあい〉に焦点をあわせようとするわれわれの立場を側面から支えてくれるものである。ところで、その〈つきあい〉とはどうい

う場面でのことをいうのだろうか。「ムラシンルイはどういう時につきあうのですか」と問えば、「物事<sup>ものこと</sup>があったとき<sup>(5)</sup>」であるという。物事というのは、結婚する、人が死ぬの二つの出来事をさす。以上の論点から、われわれは、＜ムラシンルイ＞に焦点を絞ろうとするならば、まず物事の＜つきあい＞に目を向ければよい、と考える。本稿で＜つきあい＞という時は、物事——結婚・死亡——の＜つきあい＞に限定して用いることにする。<sup>(6)</sup>

＜つきあい＞の場の分析にはいる前に、ムラ人がどのようにして＜つきあい＞を表現しているのか、予かじめ確認しておこう。第1に、香典・祝儀の量、手伝いの量として、第2に、＜つきあい＞の関係をあらわすムラ独自の言葉で、第3に、儀礼において果す役割を通じて、表現する。第2点に関していうと、これまでに出てきた＜ムラウチ＞、＜フルイ＞、＜エングミ＞等の言葉も、＜つきあい＞の関係を表わしているといえる。われわれは、これらのムラ言葉によって、香典の量の<sup>・</sup>変化を分析できるし、又逆に、その量によってムラ人の語る言葉の妥当性を裏付けることもできる。第3点——どのような関係にある人物が、どのような役割を担って儀礼の諸場面に登場するか——の中でも、＜ムラシンルイ＞の役割と、その意味の解明がわれわれの課題である。儀礼における役割の意味も、量と言葉によって解釈が可能となるだろう。以上がわれわれに与えられた課題と、解明の方向に関する視点である。これに続く章で、分析の端緒として、祝言に登場する人物の役割を、直観的にもせよ位置づけることから始めることにする。

#### 注

- (1) 下村の公衆電話は Od 家にある。隣の上林部落にも電話はあるが、ジイサマの来たうちの現在の当主は、Od 家に電話をかけに来るのである。
- (2) フルイシンルイの詳細な分析は60頁参照。
- (3) ムラの人<sup>・</sup>はC家の成立事情（a, bが結婚して一家を創設）をしているのである。だから、論文に書くとしたらA—Bの縁組と書いてもいいか、というように聞き直すと、そりゃそうに違いない、いやむしろそう書きなさい、と、われわれの分析に同意する。

- (4) ここでいう系譜意識とは、ムラ人の観念する世界と全く切り離されたところに、研究者がたとえば系図などを媒介として設定するような「意識」をさす。
- (5) ムラシンルイという関係をもつのは何故かという問に対しては、「便利だから、ズイッコ（結）になっている」等の答えが返ってきた。ズイッコというのは、又、いったりきたりともいわれる。この表現にみられるように〈ムラシンルイ〉の〈つきあい〉は、互酬的である。〈ムラシンルイ〉の互酬性に関しては本稿で特にとりあげないが、ムラシンルイの意味を探る上では極めて重要である。
- (6) 物事の〈つきあい〉では、個人的な事情が〈つきあい〉のあらわれ方に影響を与えることは少ない。

### Ⅲ 祝言のつきあい

「結び」を頂点とする婚姻儀礼は、「宵、その日、あした」の3日間にわたってとり行われる。<sup>(1)</sup>宵には、「もらう方」から「くれる方」へ「衣裳納め」がなされる。当日はくれる方への「迎え見参」が午前中から昼飯を御馳走になる形で行われ、もらう方への「見参」が夕方から深夜にかけて行われる。

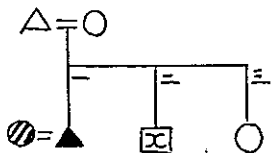
ここで祝言にみられる〈つきあい〉の特徴に予かじめ触れておこう。下村では、見参にはムラの内外を問わず、花嫁・花婿にとって〈血の道の近い〉者が主人公として登場する。これに対して、フルク<sup>フルク</sup>なったり、マワッタ<sup>マワッタ</sup>関係の〈ムラシンルイ〉は、舞台裏にあって手伝いの中心となる。〈ムラシンルイ〉以外の〈ムラウチ〉の人達は手伝いの補佐をする。いわばムラの人々は、花嫁（花婿）の家で行われる祝言のお膳立てをして、〈血の道の近い〉者を受け入れる立場にあるのだといえよう。

#### その1「見参のつきあい」

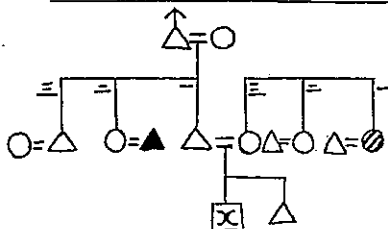
下村から嫁（婿）として婚出する場合の、見参の一行に加わる者を「見参客」という。見参客は嫁（婿）・仲人夫婦のほかに、<sup>(2)</sup>嫁（婿）と或る特定の親族関係にある者の中から選ばれる。そして合計した人数は、奇数であることが望ましいとされている。

## Ⅲ-1図

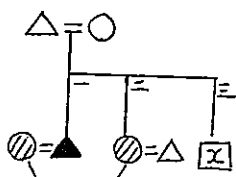
第2子の婚姻



第1子の婚姻(1) 母が嫁入の場合



第3子以下の婚姻



どちらか一方

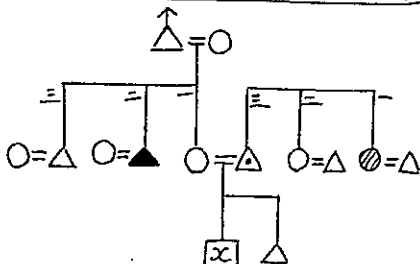
備考

☒ 花嫁又は花婿

▲ 第1見参客とほる者

⊙ 第1見参客と共に  
床柱をしょう者

第1子の婚姻(2) 父が嫁入の場合



見参客の中でも<床柱をしょう>,つまり一行の中でも代表格の者は「ア  
ンツァマ・アネサマ」(兄・姉)である。第2子の婚姻の場合は,第1子  
及びその配偶者が<床柱をしょう>ことになる。第3子以下の場合では,  
第1子の夫婦が<床柱をしょう>てもよいし,既婚の sibling の中から,  
第1子を含んで,男・女1人ずつがしょうてもよい。<sup>(3)</sup>

第1子の場合,「オオオンツァマ・オオオバツァマ」が床柱につく。  
オオオンツァマというのはオンツァマ(伯・叔父)の中でも最年長の者を  
いう。従って,嫁(婿)の父方・母方双方にオオオンツァマがいることに



なる。このうち、いわば「第1見参客」として床柱につくのは、家筋の方のオオオンツァマである。嫁（婿）の母が嫁入りした場合だと、父方のオオオンツァマが第1見参客となる。そしてその横に座るのが、母方のオオオバツァマである。父方の（家筋の）オオオバツァマが第1見参客となった場合は、母方からは、オオオンツァマが出てきて床柱につく。<sup>(4)</sup>参考までに〈床柱をしょう〉関係の一例を示すとⅢ—1図のようになる。

〈床柱をしょう〉者以外の見参客は、嫁（婿）の既婚の sibling 及びその配偶者すなわち〈キューダイ〉、嫁（婿）の両親の sibling 及びその配偶者すなわち〈オンツァマ〉〈オバツァマ〉の中から6人又は8人位が選ばれる。<sup>(5)</sup>

以上は「嫁（婿）にやる」場合の見参客の選定の基準を述べたものだが、「嫁（婿）とり」の場合の迎え見参の客についても、その原理は同じである。但し一行の人数は、迎え見参の方が少なくてもよいとされている。<sup>(6)</sup>すなわち嫁（婿）及び仲人夫婦のほかに4人又は6人位、合計7人乃至9人となる。

嫁（婿）が（下村から）婚出する際に見参の客として参加する者を、その嫁の家からみて、〈見参のつきあい〉という言葉で関係づける。同様に嫁（婿）をもらう場合に、迎え見参の客として一行に加わる者との関係を、もらう側では〈見参のつきあい〉と呼ぶ。

〈見参のつきあい〉にみられる特徴をあげておこう。まず第1に、婚姻当事者にとって、父方・母方の双方が、ほぼ対称的に登場する。<sup>(7)</sup>そして登場人物の拡がり、婚姻当事者からみて、キューダイ・オンツァマ・オバツァマと呼ばれる関係にある者に限られる。第2に〈人になんねえ〉者、すなわち未婚者は、参加できない。又既婚者であれば「血をわけた本当のキューダイ」であろうと、その配偶者であろうと、どちらがきてもかまわない。〈オンツァマ〉〈オバツァマ〉についても同様である。<sup>(8)</sup>

#### キューダイ—その1—

ここでムラ人のいう〈キューダイ〉を定義づけておこう。〈キューダ

イ>は sibling のみではなく、その配偶者にも適用される関係概念である。同様に<オンツァマ><オバツァマ>も血縁でつながった者の他にその配偶者をも含んでいる。祝言には、婚姻当事者の<オイッコ><メイッコ>は出てこないが、やはり夫婦が1つの単位として考えられている。

そして更につけ加えるならば<つきあい>——物事（婚姻・死亡）があったときの<つきあい>——の場に登場する者にあてはめられる、これらの関係概念には<人になんねえ>者は含まれない。つまり<キョーダイ>として<つきあい>の場に登場するのは、sibling の中でも、既婚者と、その配偶者をさすのであり、未婚者はたとえ「血をわけた本当のキョーダイ」でも<キョーダイ>という名称を与えられない。われわれが以後<キョーダイ>という語を<つきあい>に関して用いている時は、今定義した内容を含んでいる。なお、<キョーダイ>は、葬儀にあっては、より広い関係を含むがその点に関しては後で述べ<sup>(9)</sup>る。

## その2〔手伝い〕

見参・迎え見参と、婚姻当事者との関係については以上述べた通りである。見参の儀式（結びを中心にして）に触れる前に、見参・迎え見参を準備する裏方、すなわち手伝いの人について述べておく。

手伝いは「座敷手伝い」と「台所手伝い」に大別される。隣の上林部落では、紙面に役割りと分担者の氏名を書いて貼り出したという。座敷の方では「<sup>(10)</sup>チョウシクワニ」<sup>(10)</sup>、「酒番」<sup>(10)</sup>、「客取り持ち」等の手伝いが必要とされる。台所手伝いには、「料理人」と、その補佐役の「料理人手伝い」が必要である。料理人は、結びのできる人と同様に、大体決まった人が<sup>ソツチュー</sup>村中の祝言には頼まれた。

他に、「餅搗き」（1人）、「長持かつぎ」（2人）が手伝いとして出る。前者は嫁が見参の行なわれる家に入ってくる際に、台所で餅を搗く役であり、搗きあがっている餅でも「この時とばかりに威勢よく」搗かなければならなかったという。

祝言に至るまでには、部落外婚の場合だと両部落における「ところふう」の相違について調整をしておかねばならない。その橋渡しをするのが仲人である。調整がついたなら、下村で行なわれる儀式の細目まで決め、準備をする。たとえば、上に述べた手伝いの分担や、料理の献立を決めることである。この準備段階に参加するのが仲人、料理人、ムラシンルイのとつゝま（当主）である。

準備段階から祝言の当日までの裏方の全仕事に目を配り、統轄する役を「大世話人<sup>オオセワニン</sup>」という。隣り部落の上林では、手伝いの役割分担表の筆頭に、「大世話人某々」として貼り出される。そして当日、台所のヨコザに座って指揮をとるといふ。下村においても、形式的には大世話人が存在したらしい。その大世話人には、婚姻当事者の家にとっての〈イケダイ〉の当主になる場合が多かったといわれる。ところが儀式の細目が「わかんねイケダイ」も実際には出てくる。そうすると結びのできる、祝言のベテラン格の人は「こちらから（イケダイを）ないがしろにするわけにはゆかねえが、オラみてえのは、忙しくなるとズカズカやっちまう」ことにもなる。

上林・堂山等のホカ部落では、<sup>(11)</sup>「本家」が大世話人になるということは明確にいわれる。それに比して、下村では<sup>(11)</sup>〈イケダイ〉が大世話人になるということについての、はっきりした規範はない。下村での〈イケダイ〉は、祝言においては婚姻当事者の家にとってのムラシンルイを構成する中の一戸としての役割しか担ってはいないのである。この点は特に注意する必要がある。

如何なる資格の者が大世話人になろうと、或いはその大世話人以外の者が、実質的な采配をふるうことになっても、その下で実際に仕事をする人がいなければ準備は進まない。その仕事を受け持つのは〈ムラシンルイ〉と隣近所である。〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉は関係しない。

隣近所<sup>リンチユー</sup>というのは、「昔は村中頼み頼みしたものだが、今は上組で祝い

事のある時は上、下なら下」という範囲をさしている。戦時中の隣組制度がきっかけとなって、上組・下組にわかれたという話をしばしば聞く。従って手伝いも戦争の頃を境として、その前が村中、そして戦後の座敷婚では組に頼んでいたと解してよいだろう。その隣近所は、当日一日だけの手伝いで、人数は1人である。

一方、＜ムラシンルイ＞は「宵・当日・あした」と「三日間の手伝い」を依頼する。人数も「二人来て下さい」とか「家内中で来て下さい」というように多くなる。

手伝いとしてではないが、やはり裏方として重要なのは、「仲宿（小宿）」<sup>ナカヤド コヤド</sup>を頼まれる家である。仲宿というのは、見参（迎え見参）の一行が、相手方の部落に到着しても、見参（迎え見参）の行なわれる家へは直行せず、ひとまず休憩する場をいう。ここで婚姻当事者は衣装を着替える。花嫁の場合だと「道人着」<sup>ドウジンギ</sup>から「江戸棲」<sup>エドヅマ</sup>に着替える。宵の衣装納めに相手方から贈られたものである。

仲宿を依頼されるのは大方、婚姻当事者の家の＜ムラシンルイ＞である。「お茶飲み友達」のようなところに頼むと、シンルイの人にとっては「オライなどねえでもいいだべっばな」となり、又、ムラの人々にしても「あそこにあのいえあるのに頼まねえでは……」などということになる。

祝言のあした（翌日）、婚入してきた嫁（婿）を「ムラマワリ」に連れてゆく。その案内をするのも＜ムラシンルイ＞の家のものである。花嫁のムラマワリには、たとえば若い嫁、花婿の場合にはあととりの息子、が案内することになる。

以上見てきたように、事実上の指揮は、チョウシクワエや料理人といった慣れた人がとるものの、祝言の手伝いは、員数からしても、役割からいっても＜ムラシンルイ＞が中心となり、＜ムラシンルイ＞以外の＜ムラウチ＞の家の者がそれを助ける形となる。他に婚姻当事者の仲間という資格での手伝いも、若干あることはすでに述べた通りである。

## その3〔結び〕

ここまで述べてきたところで、祝言に参加すべき人々と、婚姻当事者乃至、その家との関係については、ひとまず、説明し終えたと思う。そこで、祝言の儀礼の中で一応頂点と考えられる、結びについて述べる。

仲宿で休憩していた見参の一行が、数回、催促された後、見参の行われる家へと向う。図Ⅲ-4（36頁）に示した如くに座につくと餅が出される。それから結びがはじまる。結びが終わってから本式の宴会があるのだから、結びは、いわば食休みにあたるようなものだと言明する人もいる。

結びが行われるのは、ふつうデドの座敷である。本来ならば仏壇があるカッテで結びを行うべきだといふ人<sup>(12)</sup>が多い。

デドの座敷に花嫁・花婿が向いあって座り、仲人夫婦がそれぞれの介添役としてその後に座る。皆が揃って、結び人（チョウシクワエ）が花嫁・花婿の間に位置を占めると、彼は、「これより御仲人<sup>ゴチュウニン</sup>さんの代理としてとりむすびを致します」と断わる。すると仲人は、「よろしくお願いします」と応え、それから式が始まる。結び人が謡曲をうたい、盃が花嫁・花婿の間でやりとりされる。酒つぎの手伝いには、見参が行なわれる家の＜ムラシンルイ＞の子供で、二親の揃った者が出る。

花嫁・花婿が神妙に控えて結びが進行する一方では、家の前に＜ホカムラ＞からも結びを見に来た人々がいて、手桶に酒や、簡単な肴を出してもらったのを、めいめい「勝手に飲みのみして」花嫁・花婿の悪口をいってふざけたり、さかんに賞め言葉をいったりしている。カッテの手伝いの人達にもぎやかである。ふすまは全部あけてあるのだから、どこからでも見えるわけだ。

花婿（婿とりの場合は花嫁）は正式には、この結びの時だけにしか出てこない。その花婿が退がると、今まで花婿が居た席におやつ<sup>おやつ</sup>と、おか<sup>おか</sup>かつ<sup>かつ</sup>あ<sup>あ</sup>ま（花婿の両親）が二人して座って花嫁と「親子の名乗り」をする。結び人が謡曲をうたって盃をかわすわけだ。両親も、正式にはこの時だけにしか出てこない。続いて花婿の＜キョーダイ＞が出てきて「キョー

ダイの名乗り」、＜オンツァマ＞＜オバツァマ＞が出てきて「オジ・オバ名乗り」が行われる。＜キョーダイ＞＜オンツァマ＞＜オバツァマ＞は、主として迎え見参にいった人とその配偶者である。そしてその後、花嫁の仲間になるムラの若い嫁達が幾人か出てきて「仲間の名乗り」をする。（婿とりの場合は、ムラの家のとおり息子が出てくる）こうして、めでたく式が終わる。

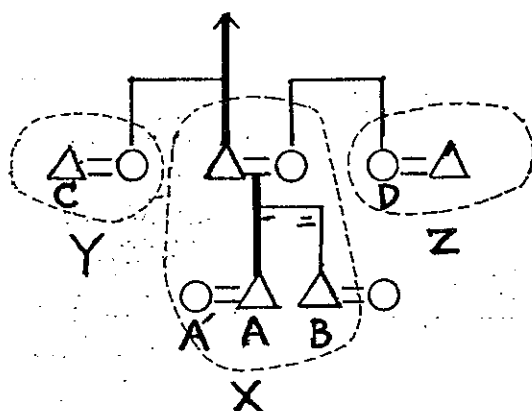
花嫁・花婿は、両者にとって＜血の道の近い＞者達により、夫婦になることを認めてもらったことになる。これまでは両者とも＜人になんねえ＞者として物事の＜つきあい＞には参加できなかった。以後は夫婦が単位となって、参加する資格をもつことになる。たとえば花婿の＜オンツァマ＞にしてみれば、花婿を新たに＜オイッコ＞として、同時に花嫁をも＜メイッコ＞として認め、両者をあわせて一つの単位として認定することになる。

ところで、（迎え）見参の一行に加わる者は、＜キョーダイ＞等であるといった。これら参加者は、個人を単位としているのだろうか、或いはそれ以外の（たとえば家）を単位としているのだろうか。

いま、X家の長男Aが結婚する場合を考えてみる。（図Ⅲ—3参照）図のようにAに＜血の道の近い＞者が存在すると仮定すると、（迎え）見参の客となるのは、C、D、であろう。そしてX家からは誰も参加しない。二男Bの結婚にあたっては、X家よりA、A'が参加し床柱をしょう。一般に、Aの時のように当事者の家の代表という形での見参客が必要とされないのなら、BのときのA、A'の参加資格も家の代表としてではなく、B—Aの親族としての関係に基づいていると考えられる。参加者が当事者を中心とした親族名称（キョーダイ等）で呼ばれることも、この判断を裏づける。

<sup>(13)</sup>  
御祝儀・引出物をやりとりする単位をみてみよう。C、Dは御祝儀をもってくるが、A、A'は御祝儀を出さない。引出物は、Bが個人として出すのではなく、X家として出すのである。となると御祝儀もC、D個人と

Ⅲ-3 図

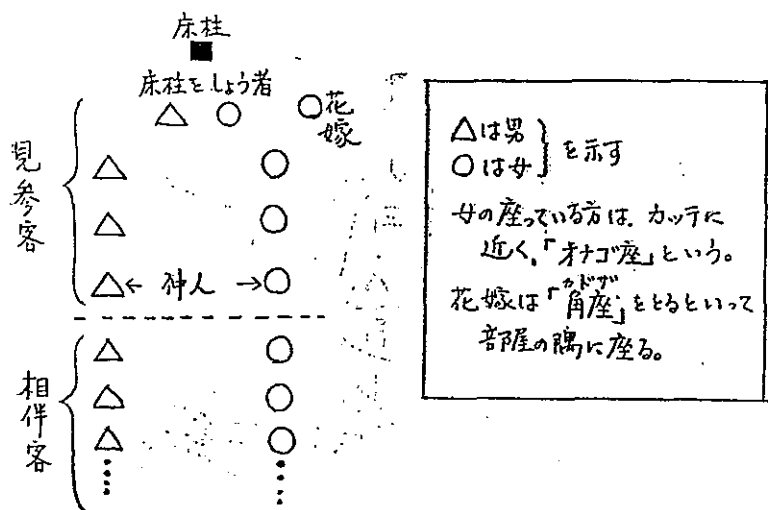


備考：点線内は、X, Y, Z 各家の成員を示す。

して持ってくるのではなく、Y, Z家として、X家に対して持ってくるのだといえよう。A, A'は、儀式の場では弟Bの結婚を祝い、それを承認する役割を担っている。ところが贈与の場では、X家のあととりとして、むしろ御祝儀を受けとる側にあるのだといえる。婚姻当事者が第3子以下の場合では、同じ〈キョーダイ〉の中でも、あとの〈アンツァマ〉以外の〈キョーダイ〉は、御祝儀を持ってこなければならない。というのも、通常は、結婚すると、あととり以外の者はその家に残らず、別の家の者となるからである。<sup>(14)</sup>

家としての〈つきあい〉——御祝儀・引出物——と、夫婦であることだけが条件であるような個人としての〈つきあい〉——<sup>(15)</sup>儀式——とは、下村の人々の生活の中で意味づけが異なっているはずである。個人と家の原理がどこで交錯し、どこで分岐するのか、祝言を通じてそれを明らかにすることは困難かもしれない。この問題は、葬式(とくに葬列)の分析を通じて、〈キョーダイ〉のつきあいの特殊な性格(キョーダイの資格はその子供にまで継承される場合がある)に触れつつ解かれる。(なお、上に述べた床

## III-4 図



柱をしょう者の違いの意味するところについては80頁参照)。

#### その4 〔相伴のつきあい〕

相手方からの見参(迎え見参)客は<床柱をしょう>者から順番に上座につく。仲人はその中でも一番下<sup>(16)</sup>に座る。仲人に続いて座を占めるのが相伴客である。(図III-4参照)見参(迎え見参)の客が相手方からの客であるのに対して、相伴客は、主催する側のつながりの者である。相伴客となるのは、見参(迎え見参)に、人数の都合で加われなかった<オンツァマ><オバツァマ>、そして婚姻当事者の祖父母の<キョーダイ>が招かれる。

<ムラシンルイ>の家の者も、必ず相伴客となる。但し<ムラシンルイ>の中でも、<キョーダイ><オンツァマ><オバツァマ>にあたる者は<見参のつきあい>である。<オンツァマ><オバツァマ>が大勢いる時でも、ムラの<オンツァマ><オバツァマ>が優先されることが多いからである。一方どんなに世代を経過した<ムラシンルイ>でも、少なくと



も相伴の膳には招かれるのである。ここにも〈ムラシンルイ〉との安定した〈つきあい〉を見出すことができる。

なお、相伴客を婚姻当事者の家からみた関係として〈相伴のつきあい〉と呼ぶ。

〈ムラシンルイ〉は手伝いとしても、又相伴客としても祝言に参加するわけだが、同一人が同じ時刻に一人二役をするわけにはゆかない。それで、〈ムラシンルイ〉のとつあま（戸主）が相伴に招かれると、かあさま（主婦）が手伝いにまわるのである。かあさまの方も祝言の当日の最後のふるまいである、「手伝い振舞<sup>テツヂ エブルメエ</sup>」には招かれる<sup>(17)</sup>。

#### その5〔茶使い・手伝い振舞〕

見参では、イリの座敷を主として用いる。見参が終わって相手方の見参客が仲宿についてやすむと、今度は同じ家のカッチを舞台としてふるまいが行われる。「茶使い」は、又、「三ツ目の茶の式」とか「仲間入り」ともいわれる。花嫁の仲間になる人に「使い」を出して呼んでくる。すなわち、ムラの若い嫁達や、未婚の娘達である。これに対し、婿とりの場合は「若い衆振舞<sup>ワケ エシユブルメエ</sup>」といって既婚・未婚を問わず下村の全青年団員が呼ばれた。

続いて「手伝い振舞<sup>テツヂ エブルメエ</sup>」がはじまる。これには手伝いをした人全員が呼ばれる。手伝いの人が、同時に茶使いに呼ばれる立場にあるという場合も多い。それゆえ茶使いと、手伝い振舞には、別々に「使い」が出されるが、宴は事実上一つのものになってしまうことが多かったようだ。この間、花嫁・花婿は酒をついでまわった。宴の終りは「盆踊りでお別れ」という雰囲気だったという<sup>(18)</sup>。

婚姻当事者にとって〈血の道の近い〉者が「本客様」として祝言の表舞台にたつのに対し、〈ムラシンルイ〉をはじめとするムラウチの人々は、それを裏から支え、成功裡に祝言が終わるよう各自の任務を果たす。ここで

は、ムラ人の言葉を通じて舞台裏の雰囲気をしることにしよう。

＜ムラウチ＞の、しかも組内の縁組の例をひいてみる。嫁方・婿方ともに、偶々＜ムラウチ＞に＜オンツァマ＞＜キューダイ＞が大勢いた。そうになると、主役であるはずの＜オンツァマ＞が手伝いとしてダンスをかついで新居に運び込んでから、改めて見参の一行に加わるという形になる。一般に、＜ムラウチ＞の縁組について、「ムラ同士はゾウサなくてよい。それでいいの。」「ムラ同士であまり四角ばっていると、オドケ（道化）語ったりして……」などの言葉を耳にした。

祝言のあした（翌日）には「残酒<sup>オンス</sup>」といって、花婿（婿とりの場合は花嫁）の両親の仲間の人達を招いてふるまった。残酒について1人のムラビトは、「ムラの人が多いから、見参よりも却って楽しい。残酒の方がざっくばらんでよかった。賑やかだから……」といっている。この言葉は、残酒だけでなく、茶使い、手伝い振舞にもあてはまるだろう。

#### その6〔祝言とイケダイ〕

＜イケダイ＞は祝言にはどのようにかわるのだろうか。これまで見てきたところでは、＜イケダイ＞が大世話人として形式的にせよ手伝いの中心となる場合もあるし、ムラシンルイの一軒としての手伝いを果すだけのこともあった。では＜イケダイ＞の客としての扱いはどうなっているのだろうか。

「ホカムラではイケダイは見参だが、オラムラではイケダイは相伴。<sup>(20)</sup>相伴の中でも席順は上でない。見参（迎え見参）には血のつながりのない者はいけな

い」といわれており、他のムラシンルイと何ら異なった扱いをうける訳ではない。勿論、イケダイといってもその成員と、当事者の家の成員との親等が近い場合もある。その時には＜見参のつきあい＞<sup>(21)</sup>をするのはいうまでもない。

このように、下村における＜つきあい＞の特徴を、ムラ人自身が＜ホカムラ＞との対比において自覚しているのである。すなわち、＜血の道の近

い〉者が下村では客として重要であり、たとえイケダイでも、祝言において果す役割はムラシンルイ一般となんら変わりがなく、祝言を裏から支えるのである。

ムラシンルイは〈血の道〉と〈ムラウチ〉、二つの原理が交錯するところに成立する。〈ホカムラ〉なら〈フルク〉になって、既に〈つきあい〉が切れてしまったような関係でも、ムラなるが故に〈つきあう〉のである。次章では、ムラの内外を問わずに、まず、〈血の道〉の原理を探ってみよう。

# 注

- (1) 山都町では、昭和30年頃から、「公民館結婚式」というのが登場してきた。前公民館長を中心とする人達が始めたもので、式・披露宴ともに町の公民館で行なうやり方と、披露宴だけは、町の料理屋とか旅館で行なうやり方の二通りがある。下村では昭和40年を境として、それ以後は、旧来の「座敷婚」による結婚式は全く行なわれなくなり、公民館結婚（もしくは、会津若松などの旅館で式を挙げる）に変わっていった。

ムラ人の1人は公民館結婚を次のように意味づけている。「今は公民館でやるのが理想でねえかな。金もかかんねえし。」

- (2) 仲人には、〈血の道の近い〉者はならない。
- (3) 一般に、物事の〈つきあい〉に登場する〈血の道の近い〉者は、血縁者に限らず、その配偶者も含む。但し、そのとき、血縁者が女である場合に限ってその夫が、参加できる。たとえば、ここでは第1子が女である場合は、その夫が床柱をしょうこともある。

なおこの点については、30頁に詳述する。

- (4) 長子相続は〈ホカムラ〉でも一般的であったと思われる。従って、ここで母方のオオオンツァマ（オオオバツァマ）というのは、母の「実家」のあととりであるといってもよい。
- (5) 伯（叔）父（母）に関しても、sibling について述べた本章注(3)をそのままあてはめることができる。〈オンツァマ〉〈オバツァマ〉は、現実的に既婚である場合が殆んどだが、規範としても既婚でなければならない。この点についても〈キューダイ〉と同様である。
- (6) 座敷婚の儀礼と〈つきあい〉に関する調査に応ずることができたのは、当然のことながら、およそ40才以上の年令の人々であった。その人達が体験して

きた座敷婚では、迎え見参よりも、見参の方が重要視されていた。たとえば、婚姻儀礼の中から迎え見参を省略した場合もある。(その理由の説明としては——戦争中だったから、ムラウチの縁組だったから、或いは逆に、相手が遠いところだったから——などを耳にした。)儀式の内容も迎え見参の方が簡略化されていたらしいというものの、両者が儀式として、基本的には対称的であるといえる。

(7) この点に関して、ムラ人自身次のような説明をしている。

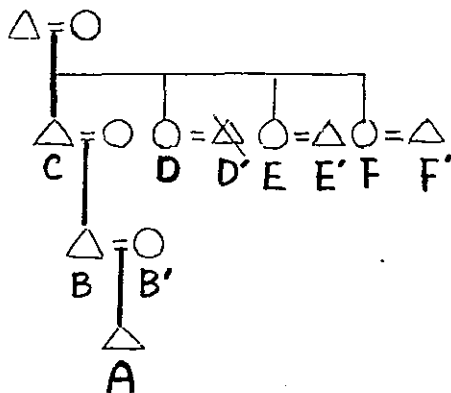
「オンツァマ、オバツァマ多い時は父方代表〇〇、母方代表××」として参加する。

「父方(母方)ばっか先にすると、年とった者の席が下になっちゃうべえ。」

(8) <見参のつきあい>は、婚姻当事者の家からみた関係を示すものであるから、見参迎え見参の一行の中で、婚姻当事者、及びその家のあとのアンツァマ・アネサマを、<見参のつきあい>とはいわない。このことは、儀式において婚姻当事者の親族として登場する者が、別の場面では当事者の家のシンルイの成員としての意味を担う者へと変質していることを示唆する。(34頁参照)。又仲人も、<見参のつきあい>という語では表現されない。そうすると、見参客の中で、当事者の家にとってシンルイにあたる者だけが、<見参のつきあい>と呼ばれることになる。

(9) <キューダイ>は、夫婦を一つの単位として考えたときに成立する概念なのだが、「夫婦は一心同体」という言葉を時折耳にした。又、次のような話も、参考になるだろう。——座敷婚にもっとも詳しい古老は、公民館結婚式では、花嫁・花婿をはさんで仲人が正座につくが「これが一番ええ」と語った。——

Ⅲ-2 図



伝統を一度かいくぐっての言葉だけに、より深い意味がこめられているように思う。本章注(17)も参照してほしい。

夫婦のうちどちらが、実際に参加するかという点に関して一例をあげておく。

Aの結婚のときB、B'の〈キョーダイ〉は当然〈見参のつきあい〉である。ところが「一段下がった」〈つきあい〉として〈相伴のつきあい〉がある。たとえば、Aの祖父Cにとっての〈キョーダイ〉は〈相伴のつきあい〉となる。Cから聞いた話では、別に夫婦のうちどちらがいくべきかは決まっていないという。たとえば、Dは夫のD'が死んでいるのでD自身が出席した。EはE'が、FのところはF自身が出席した。「Eのところはどこへ行くのもE'だし、FのところはFばかりがゆくなあ。家によるようだ。」と語った。

(10) チョウシクワエとは、「結び人」ともいう。結び(とりむすび)をする人のことであり、その繁雑な儀式を正確に覚えていて、<sup>ツグイ</sup>誰もできなければならない。仲人とは又別の人が受け持ち、下村では、必ずいつも1人か2人結びのできる人がいた。

(11) 19頁参照。

(12) ムラ人の説明では、御先祖様の前(カッテの仏壇の前)で結びをするのが本来の姿なのだが、ふつうのうちではカッテは手伝いの人で一杯で、とてもそこでするわけにはゆかない。仕方がないからデドでやることになっているのだという。

(13) 御祝儀・引出物について。〈見参のつきあい〉は、「最高でなければならない」とされている。一方、次節で述べる〈相伴のつきあい〉は「一段落してよい」ことになっている。引出物も、御祝儀にみあった差があるのは当然である。

(14) 57頁参照。

(15) このように類別するのは、当然のことながら、単純化して特徴をとり出すためのものにすぎない。

(16) 河沼郡の長井部落では、仲人が床柱をしょう。長井から嫁・婿をもらう場合、ところふうに従って仲人は迎え見参の時には床柱をしょう、下村で行われる見参では下に座る。

(17) 見参に参加する〈アンツァマ〉〈アネサマ〉夫婦の場合を除けば、二人(夫婦)で同じ座敷に客として呼ばれることはないと思われる。これに関してある夫婦は次のように語った。

「金持ちの家だとか、キョーダイ少ない家では——オンツァマ達夫婦で来てくなんしょ(来て下さい)——ということもある。(がふつうは1人だけである。)ほんとうなら、夫婦でいくのがいいことでねえべか」

(18) 嫁(婿)を「くれる方」でも、嫁(婿)を見参の一行と共に送り出したあと、手伝い振舞が行われる。然し、その時の心持ちは相当違うようだ。「嫁(婿)をくれる方は、嫁(婿)が行った後は葬式出たと同じだ。さびしくなから……」

(19) 父親の仲間としては、「伊勢講の同行<sup>フーギョー</sup>」などである。伊勢講は近隣部落にもまたがる講である。母親の仲間は「観音講の同行<sup>トウギョウ</sup>」が呼ばれる。観音講は、下村のほぼ同年代の嫁達(茶使いに招かれて同席したような人達)が「会津33観音めぐり」をして、それをきっかけとして死ぬまで交際する。下村の人の死にあたっては七日毎の法事に御詠歌をうたい、仲間(同行)が死んだ時には、死装束を縫う。

(20) 下村との対比において語られているのでホカムラはどこでも「イケダイが見参だ」という意味ではない。＜ホカムラ＞——＜ムラウチ＞という語は、このように、＜ムラ＞というものをムラ人が明確に自覚して語るために用いられることもある。

(21) ＜ホカムラ＞の例をみておこう。

○河沼郡の長井部落では、「本家を重く見る」

○小布瀬原部落では「本家よりも(血縁的に)近い家の場合には本家の上にその家が入る。」(以上下村での情報)

○堂山部落では、本家は見参ではないが、相伴の中では一番の上座につく。  
(堂山での情報)

○上林部落ではイケダイ、本家が＜床柱をしょう＞。(未確認の情報)

なお、本家、イケダイという用語法については、19頁を参照。

#### IV 葬式のつきあい

##### § 1 儀礼のあらまし

##### 野送りの当日まで

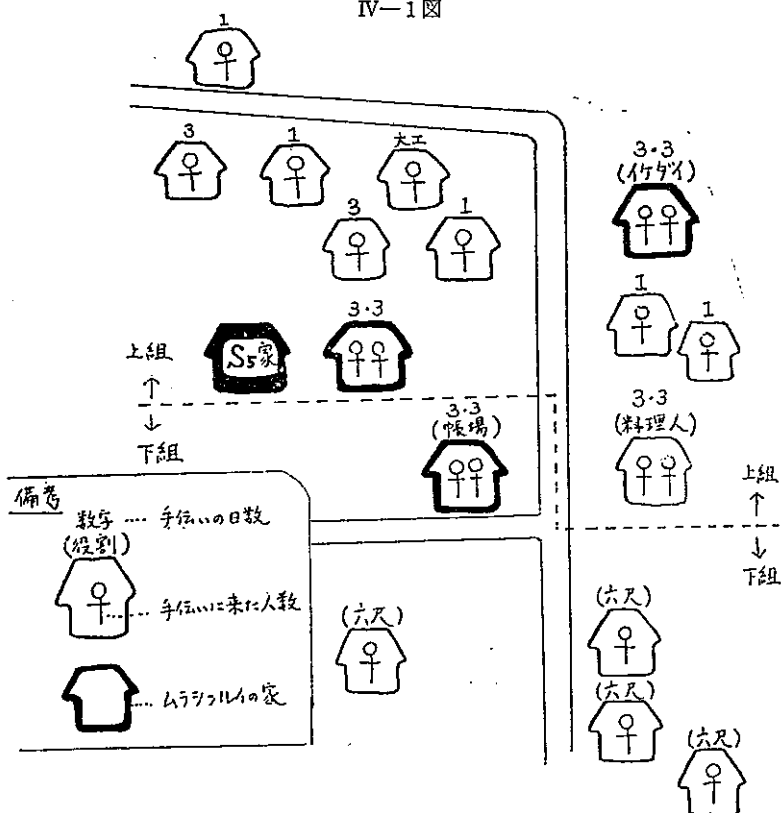
下村のある家で不幸が起こると、まず通知を受けるのは、死者の＜コド<sup>(1)</sup>モ>、＜キョーダイ><sup>(2)</sup>である。通知を受けた者は「顔見舞<sup>(3)</sup>」に駆けつける。その晩は通夜となり、集った者の中の年長者と、葬家のあととり、それに＜イケダイ>が一緒になって葬式の日取り、「知らせ」を出す相手、葬列の並び順を相談する。葬式はおよそ二晩通夜を過ごした後、つまり亡くなった日から一日置いて行われる。＜ムラウチ>の人達は、正式には知らせを受けて初めて式の当日に使用する野菜を携えて「顔出し<sup>カオダシ</sup>」に訪れる。

式の準備は、葬式の宵、つまり式の前夜から始まり「入棺」<sup>ニツカン</sup>が行われる。宵には死者の〈キューダイ〉〈コドモ〉は必ずなくてはならない。入棺には死者の子供のうち〈人になんねえ〉者を除いた者全部と、〈キューダイ〉、〈オンツァマ〉、〈オバツァマ〉、〈マゴ〉等、人数、男女を問わず参加してよい。但し、死者のつれあいは除かれる。こうして〈血の道の近い〉者達の手で死者は清められるのである。

### ムラの手伝い

野送りにおいて葬家を手伝う者は、〈ムラシンルイ〉と<sup>クミウチ</sup>組内の者である。〈ムラシンルイ〉のうち、〈イケダイ〉<sup>(4)</sup>の家の当主は、料理、帳場の手伝

IV-1 図



いの人々の上になつて采配をふる。料理人や帳場の責任者には、その他の〈ムラシソルイ〉の者がつく。〈ムラシソルイ〉の家からは、前後三日間二人ずつ手伝いが出るのであり、組内の家からは当日だけの手伝いが一人ずつ出るといわれる。

手伝いの他にムラウチから「六尺」となる者4人が選ばれる。御棺かつぎと墓穴掘りをその役目とし、上組で葬式のある場合は、たいてい下組の葬家の〈ムラシソルイ〉でない四軒から当主（男）が一人ずつなる。

昭和36年、S<sub>2</sub>家の葬儀の際の手伝い及び六尺の顔ぶれはIV—1図の通りである。葬家は上組にあるので、上組の家は一軒残らず当日の手伝い、又は前後三日間の手伝いに出ている事がはっきりわかる。

〈ムラシソルイ〉の手伝いは量と質において確かに組内の者とは差がみられる。しかしムラに不幸が起これば、〈ムラシソルイ〉が組内の者と共に葬家を助ける点に留意したい。〈ムラシソルイ〉は、〈ホカムラ〉の〈ソルイ〉を招く葬家の裏方として機能するのであり、その点においては組内の者と機能を同じくするのである。この事は祝言においても同様であった。

### 野送りの当日

野送りの当日には、葬家の床の間に位牌を最上段に置いた祭壇が設けられる。神棚は白い紙が貼られ塞がれている。<sup>(5)</sup>

あらかじめ「十時の使い」を出してあった見舞客には「一般賄い」が供される。一般賄いは昼時となるので「御昼飯賄い」ともいわれ赤飯が必ずつく。<sup>(6)</sup>

大勢の見舞客は、一般の賄いを受けた後、ムラはずれにある観音堂の境内まで死者を送りに来るのだが、そこから先の墓地には、葬列に加わっている死者の〈血の道の近い〉者しか入る事は許されない。

観音堂の境内において方丈が経をあげ、アサガラで作られた2本の「振台」<sup>フリ</sup>を棺の上に投げて「引導渡し」<sup>インドワ</sup>の儀式を行う。これで一般会葬客は散会となるのである。<sup>(8)</sup>



野送りの列は、伊勢神社の前を避けて墓地へと下る。(17頁Ⅰー1図参照) 棺を墓穴へ納めると、参列者は手でムラの墓の土をかけ、その上へ六尺の被せる土が積まれる。参列者は各持物を供え、イケダイが最後まで世話をやくのである。

## 法事

法事には「一七忌日」に始まり、四十九日の「中陰の忌払い」に終る「七日七日の御法事」と、1, 3, 7, 13, 27, 33, 50年の年忌の法事とがある。

死者は、「壇払い」つまり中陰の忌払いが済むと仏となり、最後の年忌である「あげ法事」が済むと先祖様になるといわれる。あげ法事が終れば、春の彼岸と盆に祭られるだけとなる。野送りの日に作られた二つの位牌のうち、墓に運ばれずに祭壇に残ったものは、年忌の度に寺で戒名を書いてもらった紙片を貼り重ね、あげ法事が済むと御墓に捨てられたり、適当に始末される。

死者が先祖様となる頃には、法事を主催する当主の世代は、死者より二世代位若くなり、法事に来る死者につけてのシンルイ(死者の〈血の道の近い〉者、又はその家の者)は、当主にとっては〈フルイシンルイ〉となる。「葬式や法事に来るのはフルイシンルイ。結婚式やオボヤギにはつきあわねえ」と、当主の世代の者はいう。〈フルイシンルイ〉は、あげ法事が済むと〈つきあい〉がなくなる。但し、「系統が切れるって事はないけれど、何代も経てば使いをやっても来なくなっちゃう。ムラシンルイはそんな事はねえ。」「ムラシンルイは、減らねえ。見通しがきくからつきあう」という。このように〈つきあい〉のなくなるのは、〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉であるとされている。

さて、順をおって法事を概観しよう。

一七忌日(初七日)の法事は、野送りの終わった後すぐその日のうちに行われる。一七忌日の馳走である「ときの賄い」の席は、床の間の祭壇の前に設けられ、正座に和尚がつく。死者の〈血の道の近い〉者、〈ムラシンル

(18) イ>, 六尺が主だった客である。客は葬家にその晩は泊まり、翌朝墓参りをして帰っていく。

七日毎の法事は、その宵に<ムラシムイ>が集い、観音講のバアサマやカアサマが歌読<sup>(19)</sup>みして鎮魂をするのである。

中陰の忌払いには、<ホカムラ>の<シムルイ>も参加して賑やかに壇払いを行う。

年忌は、盆や彼岸の折りに何人かの仏の法事をまとめて行う。

埋葬して間もない墓には墓石もなく、土盛りしたり、平らな石を置いただけであったりするが、法事を行ってゆくうちに、夫婦でひとつの墓石を立てるといわれている。小さな石片だけで、ついに墓石のたたなかった墓にも、盆には供物が供えられる。

## § 2 <つきあい>の分析

### その1〔葬列〕

埋葬を見届ける野送りの葬列に参加出来る者と、その並び順は次の通りである。

墓案内……区長

方丈……壇那寺の和尚

生台……イケダイ<sup>(20)</sup>のオトツツマ (当主)

御位牌……(葬家の)あととり

この間にある持物の順序は、家

|   |   |
|---|---|
| 振 | 台 |
| 衣 | 裳 |
| 霊 | 前 |
| 灯 | 明 |
| 香 | 炉 |
| 水 | 湯 |
| 茶 | 湯 |
| 四 | 花 |

死者の<血の道の近い>者から並ぶ

仏のキョーダイ (年令順)

↓  
仏の親のつながり

↓  
オイッコ

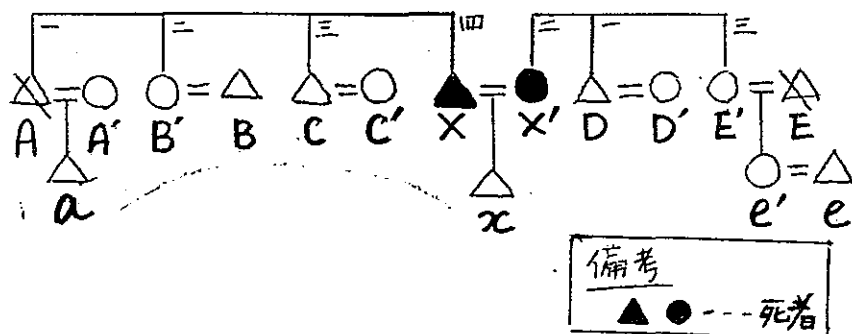
六 花  
六 合

御 棺 付……コドモ又はマゴ

ここまでで並ぶ者は、男でなければならない。更に「人になんねえ者は、葬列にはつけねえ」といわれ、未婚の者も原則として葬列からは除外される。この事は祝言においても同様であつた。物事の〈つきあい〉の場への参加は、夫婦となった者のみに許されるのである。

女は、棺の前につけられた六尺の白い晒の布で作られた「ゼンの綱」<sup>(21)</sup>を持って野送りに加わる。棺の根元に死者のつけあいが付き、次にコドモ、キョーダイ、メイッコの順に棺から遠ざかる程死者から遠い関係となる。ムラビトは、葬送順を定める基準を仏に対して〈血の道の近い〉者からと説明し、「仏のキョーダイ、親の繋り、オイッコ」の順に並ぶという。これは文字通り血の道の原理に沿ったものと思われる。しかし、注意しなければならないのは、〈血の道の近い〉という言葉は、けっしていわゆる血の濃さを意味していないという事である。例えば、仏の〈キョーダイ〉として参列する者に限ってみると、以下のようなケースが見られる。

IV-2 図



Xが死亡した場合は、a, B, C, D, eの順で葬列につき、Xのつけあいで嫁のX'が死亡した場合は、D, e, a, B, Cの順で並ぶ。

キョーダイ その2

＜キョーダイ＞という親族名称で指される者が sibling とその配偶者も含む事は、キョーダイーその1ー（29頁）で述べた。故にB'のかわりにBが並んでいるのは解る。又、つれあいの sibling とその配偶者が＜キョーダイ＞である事もIV章注（3）において指摘した。問題となるのはa, 又はeである。AもしくはEが死亡していたなら、彼等を除外して他の＜キョーダイ＞が年の順に並べばよいと思われる。しかし、死者からみれば＜オイッコ＞と呼ばれるa又はeが＜キョーダイ＞の資格で親の代わりに登場するのである。＜つきあい＞の場に登場する＜キョーダイ＞は、ただ単に＜キョーダイ＞という親族名称を与えられた者のみではなく、その子も又＜キョーダイ＞の資格を継承してその場に登場しうる事を確認しておきたい。

次に葬送順の実例の検討に入りたい。資料は、O<sub>2</sub>家の送葬香典受納帳記載の昭和39年没のO<sub>2</sub>Sの葬送順と、昭和43年没のO<sub>2</sub>Iの葬送順である。選択の基準としては、(1)双方の葬儀がほぼ同時期とみなされる事、(4年の差である)(2)双方がO<sub>2</sub>家の当主であった事、(3)入り婿ではない、(4)しかも世代を異にしているという条件に着目した。つまり、生存するシンルイに殆ど変化がない筈である故、参加者の変化は死んだから現実的に来られないのではなく、死者との関係によって参加の仕方が左右されと考えられる。

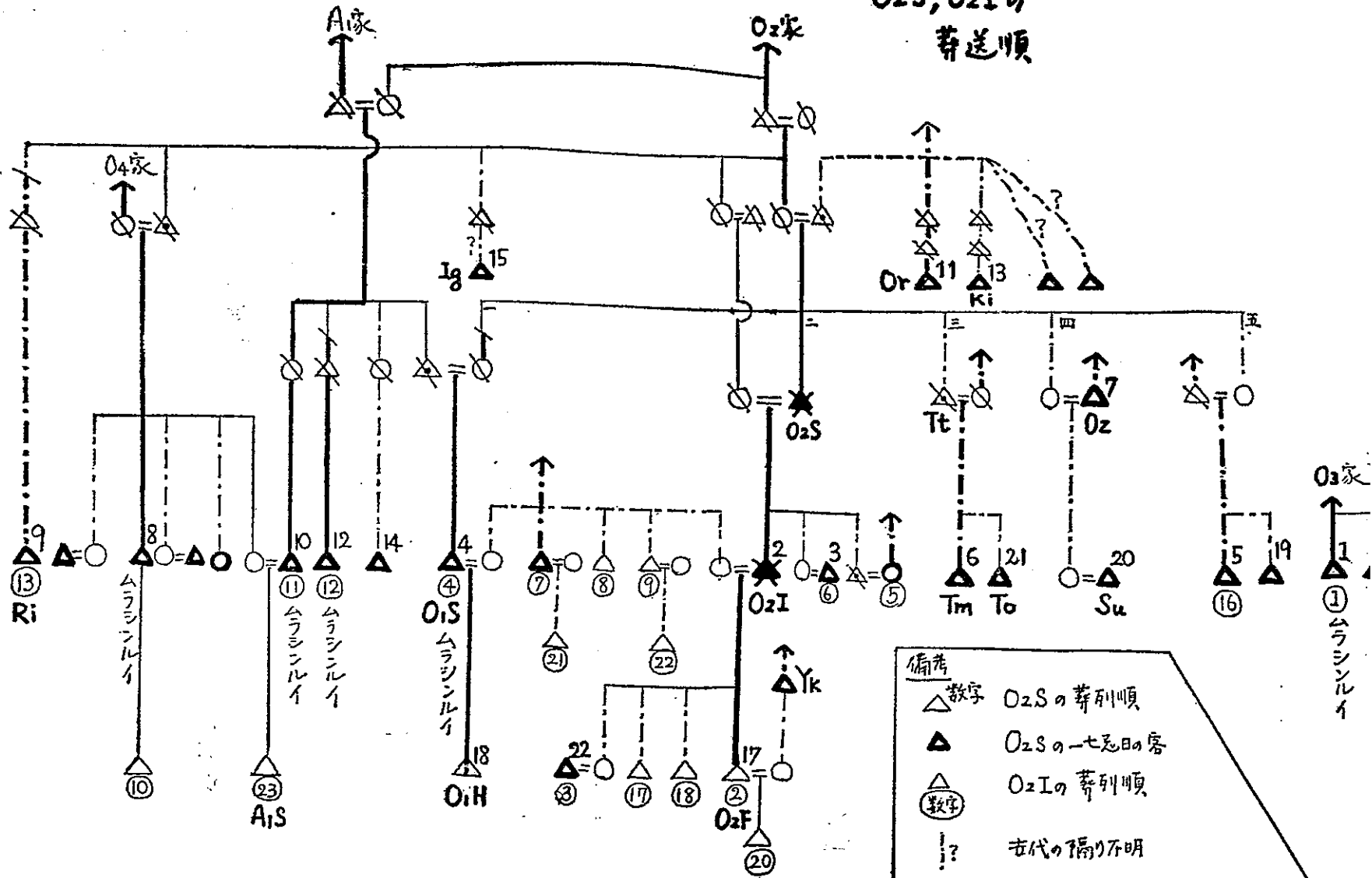
まず個々の葬送順を吟味し、ついで<sup>ダイグラ (22)</sup>代替りによって引起される変化に焦点をあわせる。

両故人の葬送順は、死者の身近な者からという原則が守られている典型的な例と考えられる。

系図には、実際に葬列に加わった者に、加わった順序に従って番号をふった。O<sub>2</sub>SとO<sub>2</sub>Iの場合の区別は、数字の表記法によって区別してある。表は、死者別に用意した。

＜つきあい＞の場に或る親族名称を与えられたシンルイとして登場する

O<sub>2</sub>S, O<sub>2</sub>Iの  
葬送順



備考  
 △ 数字 O<sub>2</sub>Sの葬列順  
 ▲ O<sub>2</sub>Sの一七忌の客  
 △ 数字 O<sub>2</sub>Iの葬列順  
 |? 古代の隔り不明  
 その他の記号については「はしわかき」参照

者の中に、実際には親族名称の資格を継承している者も含まれる事を先程指摘した。ここでは、それとあわせて、どのような者が親族名称の資格を継承するのかという点にも注目したいのである。

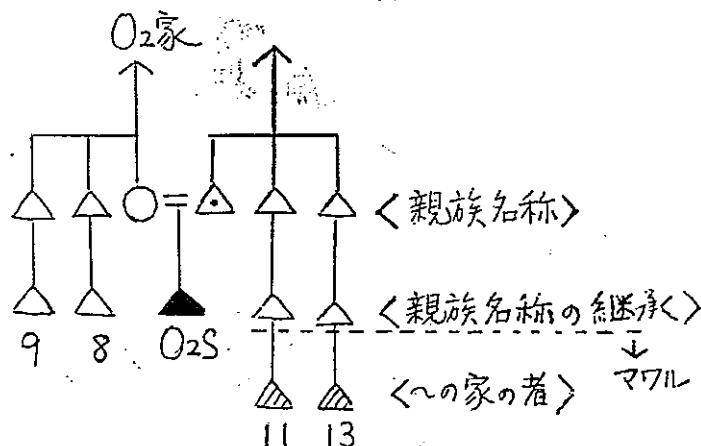
### O<sub>2</sub>S の葬送順

順を追って必要と思われる点を説明する。〈イケダイ〉の家は各家毎に決まっている。O<sub>2</sub> 家は、〈イケダイ〉O<sub>2</sub> 家と血縁では繋がっていない。O<sub>2</sub> 家が江戸時代に隣村の寺内部落から下村に移った際、O<sub>3</sub> 家に世話になったといわれる。両家は相互に〈イケダイ〉関係を結び、現在 O<sub>3</sub> 家は O<sub>2</sub> 家の本家であるといわれている。<sup>(23)</sup>

位牌持ちとしてあととりが並ぶ点は問題がない。しかしその後〈コドモ〉が〈キョーダイ〉に先だって並んでいるのは規範に反する。しかし、この種の事例は多く見出される例であり、独立した子供は一般に喪主である現当主にとってより近いシンルイである。現在の交際にアクセントの置かれた例とみる事が出来る。

8 番、9 番、11 番、13 番に並んでいる者に注目してほしい。いずれも死者の親の sibling を媒介として繋る者である。しかし参列の資格は、8・9

IV-4 図



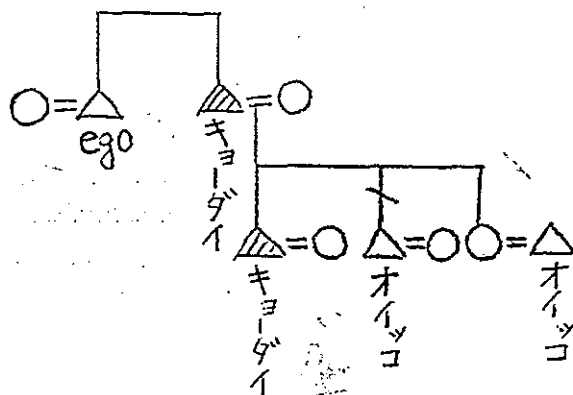
昭和39年 O<sub>2</sub>S 葬送順昭和43年 O<sub>2</sub>I 葬送順

| 順番 | 持ち物   | 参列の資格(死者を中心として見ている) | 死者との関係     | 備 考                | ムラシンルイの家の者 | 順番 | 持ち物   | 参列の資格(死者を中心として見ている) | 死者との関係         | 備 考            |
|----|-------|---------------------|------------|--------------------|------------|----|-------|---------------------|----------------|----------------|
| 1  | 一家台   | イケダイのオトツツァマ         |            |                    | ○          | ①  | 一家台   | イケダイのオトツツァマ         |                |                |
| 2  | 御位牌   | あととり                | So         | 嫡子                 |            | ②  | 御位牌   | あととり                | So             | 嫡子             |
| 3  | 霊 前   | コドモ                 | DaHu       |                    |            | ③  | 霊 膳   | コドモ                 | DaHu           |                |
| 4  | 振 台   | キョーダイ               | SiSo       | 昭和27年葬家より分家して二代目当主 | ○          | ④  | 振 台   | キョーダイ               | WiSiHu(FaSiSo) | 分家して二代目の当主     |
| 5  | 香 炉   | キョーダイ               | SiSo       | 妹の嫁入り先の嫡子          |            | ⑤  | 香 炉   | キョーダイ               | BrWi           | 女性の並んでいる例外     |
| 6  | 灯 明   | キョーダイ               | BrSo       | 弟の婿入り先の嫡子          |            | ⑥  | 灯 明   | キョーダイ               | SiHu           |                |
| 7  | 水 湯   | キョーダイ               | SiHu       |                    |            | ⑦  | 水 湯   | キョーダイ               | WiBr           | 妻の実家の嫡子        |
| 8  | 茶 湯   | 母親のキョーダイ            | MoBrSo     | 母の弟の婿入り先の嫡子        | ○          | ⑧  | 茶 湯   | キョーダイ               | WiBr           | 妻の兄弟           |
| 9  | 四 花   | 母親のキョーダイ            | MoBrSo     | 母の弟の嫡子             |            | ⑨  | 四 花   | キョーダイ               | WiBr           | 妻の兄弟           |
| 10 | 六 花   | 義理のオイッコ             | SiHuSiSo   | 分家に出した姉の婿の妹の子      | ○          | ⑩  | 六 花   | ムラシンルイ              | FaMoBrSoSo     | 祖母の弟が婿に入った家の当主 |
| 11 | 六 合   | 父親の来た家              | FaBrSoSo   | 父親の実家の者            |            | ⑪  | 六 合   | ムラシンルイ              | FaSiHuSiSo     | 父方の伯母の婿の妹の嫡子   |
| 12 | "     | 義理のオイッコ             | SiHuSiSo   | 分家に出した姉の婿の弟の子      | ○          | ⑫  | "     | ムラシンルイ              | FaSiHuBrSo     | 父方の伯母の婿の弟の嫡子   |
| 13 | "     | 父親のつながり             | FaBrSoSo   | 父親の実家の関係           |            | ⑬  | "     | 親のイトコ               | FaMoBrSo       | 父母のイトコの嫡子      |
| 14 | "     | 義理のオイッコ             | SiHuSiSo   | 分家に出した姉の婿の姉の子      |            | ⑭  | "     | オイッコ                | ?              |                |
| 15 | "     | 母親のつながり             | MoBr.....? | 母親の sibling の関係    |            | ⑮  | "     | オイッコ                | ?              |                |
| 16 | "     | 父親のつながり             | FaBr.....? | 父親の sibling の関係    |            | ⑯  | "     | 父親のキョーダイ            | FaSiSo         | 父親の妹の嫁に入った先の嫡子 |
| 17 | 御 棺 付 | マゴ                  | SoSo       | 嫡孫                 |            | ⑰  | 御 棺 付 | コドモ                 | So             |                |
| 18 | "     | オイッコ                | SiSoSo     | 分家である4の嫡子          | ○          | ⑱  | "     | コドモ                 | So             |                |
| 19 | "     | "                   | SiSo       | 甥(嫡子ではない)          | (当主ではない)   | ⑲  | "     | コドモ                 | So             |                |
| 20 | "     | "                   | DaDaHu     | 姪の夫                |            | ⑳  | "     | マゴ                  | SoSo           |                |
| 21 | "     | "                   | BrSo       | 甥(嫡子ではない)          |            | ㉑  | "     | オイッコ                | WiBrSo         | 妻の実家のあととりの子    |
| 22 | "     | マゴ                  | SoDaHu     | 嫁にいった孫の夫           |            | ㉒  | "     | オイッコ                | WiBrSo         | 妻の兄弟の子         |
|    |       |                     |            |                    |            | ㉓  | "     | コ                   | 仲人をしたから        | ムラシンルイ, ⑩の嫡子   |

番が「母親のキョーダイ」、11番が「父親の来た家」、13番が「父親の繋り」と異なっている。8・9番はいずれも死者の「母親のキョーダイ」の子であり、亡くなった親の代わりに資格を継承して参列している。死者とはイトコの関係にある。ところが、11番は死者のイトコの子である。つまり死者のイトコまでは、「父親（又は母親）のキョーダイ」という親族名称を継承して＜つきあい＞の場に登場する。が、死者のイトコの子の代に＜マワル<sup>(24)</sup>＞と、特定の親族名称を与えられる関係として類別されずに「父親（又は母親）の来た家」の者として参列し、参列の順位も下がるのである。＜～の家の者＞と表現される者は、丁度死者を中心にして＜マワッタ＞関係にあたる。13番の「父親の繋り」も、11番の「父親の来た家」と同様＜～の家の者＞という資格で参列している。相違点は、11番が父親の実家を継いだ sibling の家の者であるのに比して、13番は分出又は他出した sibling の家の者である点である。その事が並び順にも反映している。

次に6番に並んでいる Tm と、21番の To に着目したい。Tm も To も死者のいわゆる甥であり、かつ互に sibling の関係にある。しかし各々が＜血の道の近い＞順に従って葬列につくと、両者と死者との関係は各々異なったものと理解されている事がわかる。Tm は＜キョーダイ＞の参列資格で、To は＜オイッコ＞の参列資格で並んでいる。他例を参照しても死

IV-5 図





者の sibling の子、又は死者のつれあいの sibling の子の中で〈キョーダイ〉の資格を担える者は唯一人に限られる。それは〈キョーダイ〉の嫡子である。つまり〈キョーダイ〉のあととりのみが、〈キョーダイ〉という親族名称を継承して〈つきあい〉事ができ、他の子供は皆〈オイッコ〉という親族名称と呼ばれ、それに従って〈つきあい〉も〈キョーダイ〉より薄くなるのである。この〈キョーダイ〉と〈オイッコ〉の相違は、〈つきあい〉の続く世代数にも関係してくる。

### O<sub>2</sub>I の葬送順

まず、〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉に限って考察すると、死者の一世代上である親の sibling を媒介とした関係が、参列可能な限界である事がわかる。例えば、O<sub>2</sub>S の葬送順で11番の Or、13番の Og、15番の Ig は、O<sub>2</sub>S の祖父母の関係にあたるので O<sub>2</sub>I の葬列からは消える。

但し、O<sub>2</sub>S での 9 番、O<sub>2</sub>I では13番に並んだ Ri が唯一の例外である。Ri の父は O<sub>2</sub> 家に末っ子として生まれ、その時すでに20才年長の姉は長子として跡を継ぐべく姉を迎えていて、その子 O<sub>2</sub>S を生んでいた。故に、Ri の父が葬家で過ごした期間は、ほぼ一世代ずれていたわけである。姉夫婦が実際には Ri の父が葬家で育ち独立してゆく時のめんどろをみた事となる。同じ家に住み生計を共にしていたという要素が、世代の隔たりにもかかわらず Ri を近い距離<sup>(25)</sup>で感じさせているのだろう。

同様な事例をもう一つあげるならば、O<sub>2</sub>I の葬列で4番の O<sub>1</sub>S である。死者の〈キョーダイ〉のうち、O<sub>1</sub>S は死者のつれあいの sibling の夫である。しかし、死者の sibling 及びその配偶者よりも先に並んでいる。これは明らかに規範に反する。その裏には次のような事情がある。O<sub>1</sub>S は O<sub>2</sub> 家より昭和27年に分家し、それまでは〈キョーダイガカリ〉であった。いいかえると O<sub>1</sub>S の親は、〈キョーダイ〉である O<sub>2</sub>S と同居して、その孫の代までめんどろを見てもらっていたのである。その事が、O<sub>2</sub>家と O<sub>1</sub>家の距離を縮めて感じさせているのだと思われる。

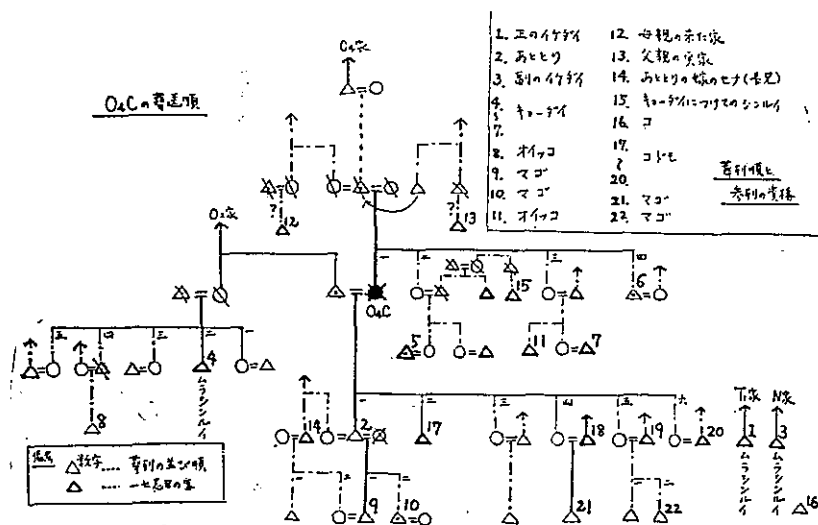
O<sub>1</sub>S の母親と O<sub>2</sub>S は sibling であり、O<sub>1</sub>S の母親が O<sub>2</sub> 家の長子と

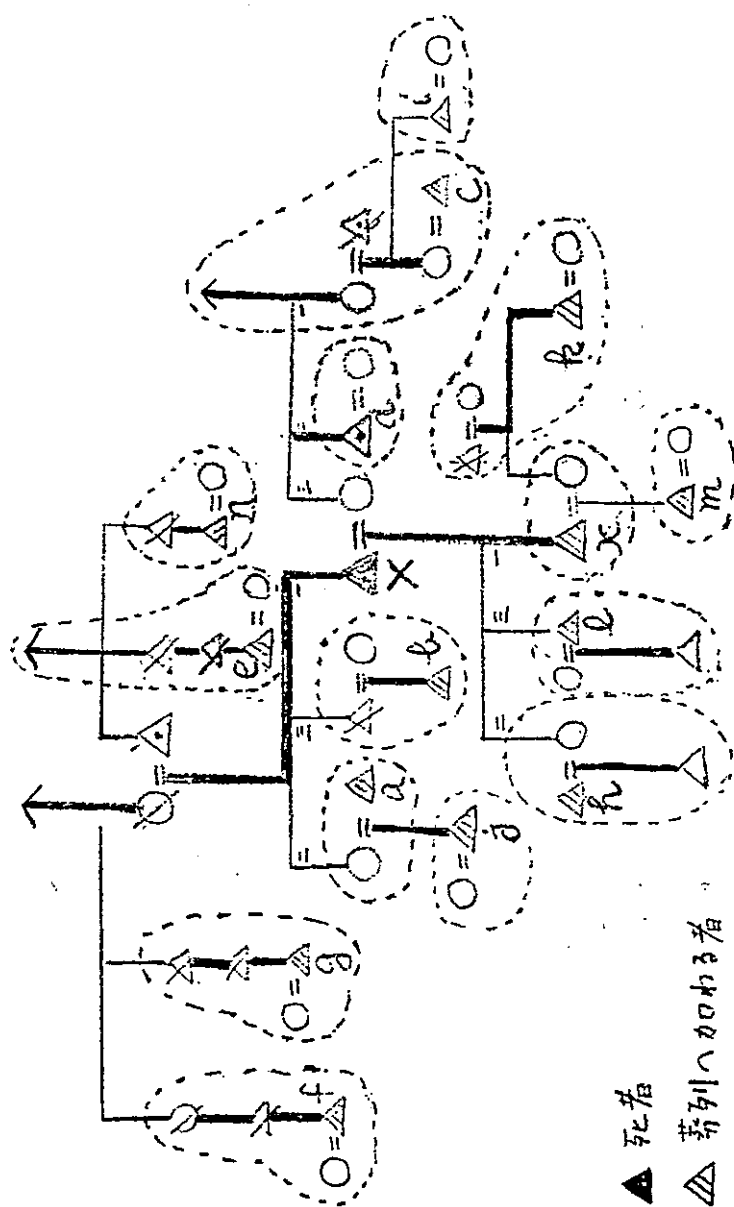
して婿をとったが、婿が早死にしたために  $O_2S$  が跡を取った。その後も  $O_1$  家と  $O_2$  家とは同居し、生計を共にしていたが、後に  $O_1S$  の代に分家に出た。(正確には同居していた時点では、 $O_1$  家と表現することは出来ない。) 明治 31 年の民法の影響により、長子相続から長男相続へと相続形態が変化する、過渡期の現象であった事も留意すべきである。

〈キューダイガカリ〉とは、既婚の sibling が、家族を含めて生産生活、消費生活を共にしている状態をさす。しかし家の当主として祝儀、不祝儀の〈つきあい〉に登場するのは、その家の跡をとっている者であり、その者が「オサイフ」も持っているのである。

$O_2I$  の葬列において、 $A_1S$  は  $O_2I$  の  $\dot{\text{コ}}$  の資格で参列している。 $\dot{\text{コ}}$  として記されているのは死者に仲人をしてもらった者だが、 $\dot{\text{コ}}$  という名称が日常用いられるのは稀である。一人で多勢の仲人をする事もしばしばある。擬制的な親子関係に類似するが、野送りの儀礼において特に重要視する程の

IV—6 図





▲ 死者

△ 葬列へ加わる者  
太い実線は家筋を表わす  
漢数字は出生順

役割は果たしていない。葬列や法事の席に死者の口が揃って参加する事もないし必要もないのである。

### O<sub>1</sub>C の葬送順：参考

次に他の家の葬送順を一例検討し、O<sub>2</sub>家の資料との相違点・共通項を探ってみる。とりあげるのは昭和14年没のO<sub>1</sub>Cの葬送順である。

第1の相違点として死者の直系卑属の姻族の参列が指摘される。先程のO<sub>2</sub>家の葬列からは、死者のあととりの嫁の実家、及び孫の嫁の実家の家族成員は、除外されていた。しかし、O<sub>1</sub>家の葬列のごとく少なくともあととりの嫁の実家が登場するのが一般的な傾向である。喪主の交際が反映する例であろう。

第2に、イケダイに正副の2人がいてそれぞれ1番と3番に並んでいる事である。O<sub>1</sub>家、T<sub>1</sub>家、N家は三軒イケダイと称される。三軒中のある家に不幸が起こると、残りの二軒のうち定められた一軒が正のイケダイとして葬列の生台につき、あとの一軒が副のイケダイとして振台を持つ事に決まっているのである。

その他の点においてO<sub>1</sub>Cの葬送順は、前述のO<sub>2</sub>家の例と共通する点が多い。

### ホカムラのシンルイと葬送順：まとめ

左図は葬列に参加する範囲の死者の＜血の道の近い＞シンルイの理念型である。点線の枠で囲まれた者は参加の資格を与えられている単位を示し、斜線模様の者はその単位の代表者として参列する者である。今まで述べてきた事を整理するために分類する。

#### (1) ＜～の家の者＞として参列する関係

e, f, g, k

#### (2) 親族名称の参加資格で参列する関係

##### i) 本人が参列

x, a, d, h, i, j, l, m

##### ii) 資格を継承して参列

b, c, n

(1), (2)の区別は、親族名称を与えられる範囲を明らかにするためにつけた。原則として葬列に参加する関係は、親族名称で参列する者であり、〈血の道の近い〉者と考えられる。しかし現実には死者の親の代で繋る〈オンツァマ〉や〈イトコ〉は死亡している場合が多い。それで、〈マワッタ〉関係の者が葬列につく。しかし、親族名称を与えられずに、〈～の家の者〉として区別されるのである。死者を中にはさんで3世代<sup>(26)</sup>の繋りが必ず参列している事は、〈血の道の近い〉者が、三世代にわたっている事を示す。

#### ムラシンルイの参列

死者からみて〈マワッテ〉いるにもかかわらず葬列に加わっている者は、殆どが〈ムラシンルイ〉である。O<sub>2</sub>S と O<sub>2</sub>I の両葬送順に共通して登場してくる者は〈ムラシンルイ〉の者が圧倒的に多く、死者の代替わりによる影響が少ない。〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉は前述のごとく死者の〈血の道の近い〉という原則を守っているので、死者の代替わりによって参列の資格を失う者が多かった。ところが〈ムラシンルイ〉は必ず参列している。O<sub>2</sub>I の妻は、〈マワッテ〉いる〈ムラシンルイ〉を指して、「動かねえシンルイ。いつも六合持つ。」と説明する。

〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉に関しては、理念型で示したように〈血の道の近い〉者という原則のもとに、かなり正確な距離感が適用されていた。ところが、〈ムラシンルイ〉にはその適用がみられない。〈ムラシンルイ〉には、〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉と全く異質な距離感が適用されるのであろうか。その問題を論じるために〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉を中心に更に葬式のつきあいの分析を進める。

#### その2 〔一七忌日の客〕

葬列に参加する者には既婚である事と、死者の〈血の道の近い〉者という条件が問われるのである。これに対して一七忌日の客となる条件は何か

という事を、次に述べる。

再びIV—3図(49頁)を参照してほしい。O<sub>2</sub>Sの一七忌日の法事の客として招かれる者は、葬列に参加した者とはほぼ一致する。葬列に加わりながら法事の客に招かれない者はまずO<sub>2</sub>I, O<sub>2</sub>Fのごとく客を呼ぶ側である葬家の成員である。

もう一例は、たとえひとつの家から葬列に2人加わっていようと、法事に招かれるのは1人だけである例である。たとえば、O<sub>1</sub>家からは、O<sub>1</sub>Sが<キューダイ>の資格で参列し、その子供のO<sub>1</sub>H(47才)は<オイッコ>として葬列に加わっている。この2人のうち法事の客に招かれるのはO<sub>1</sub>S 1人だけである。

この事から法事に参加しうる単位が何であるかを、探るきっかけがつかめた。大まかにいえばその単位は家であろう。例えば、Ttの嫡子であるTmと、その兄弟のToは2人揃って一七忌日の客となっている。Ttの兄弟のOzも、娘婿Suと共に客に呼ばれている。これは、Tm, To; Oz, Suがそれぞれ別の家の成員であるからだ。つまり、法事を主催するのが葬家ならば、そこへ招かれる者も、家を代表する者である必要がある。この点は、葬列においては同一の家より2人の者が、別々の資格を付与された個人として参列していたのとは大きな相違点である。

ところで、家とは一体どのようなものなのだろうか。家の性格を明らかにするために、ムラ言葉である<カマド>を検討してみよう。結婚して一人前となると、<血の道の近い>者としての<つきあい>の場に登場するようになる。あとの夫婦の場合は、婚家先と生計を共にするようになる。あとの夫婦以外の夫婦も、「結婚してそれから独立する」といわれるように、将来何らかの形で独立してゆく事が予定されてはいるものの、しばらくは花婿(花嫁)<sup>(27)</sup>の育った家に同居する形となる。その同居の仕方は、<キューダイガカリ>と、「カマドを別にする」の二通りがある。前者は、<キューダイ>である、あとの家族と生計を共にして、めんどろをみてもらう。後者、つまり「カマドを別にする」<sup>(28)</sup>とは、「暮らしを別にする事で昔の言葉だ」といわれ、「サイフを別にする」つまり生計上の分離がその要件となる。たとえ同一の屋根の下に暮らすとしても、間借りのような形で「デド」の座敷に「カマドを別にした」

者が暮らすというように居住空間の分離も伴うのである。

「カマドを別にすると」、当初は親又は跡を取った〈キョーダイ〉の家とは別箇に、ムラのカカリを出す必要は無い。(又は半額でよいという事もある。) ムラのカカリとは、例えば祭の御神酒、御菓子代、便所の消毒の薬代、人足賃等のムラ勘定と春の人足がある。しかし、御祝儀や見舞等のムラのツキアイは、「半額にまけてくる」というわけにはいかない。このようにムラに不幸が起これば、ムラ見舞は出す事になるが、まだ間借りをしたり小屋を借りたりしてて家とはいえない。したがって独自の〈ムラシンルイ〉も持てない。一軒を構えるとはじめて家と呼びうるものとなり、ムラの中に家が新しく生まれるのである。そしてまず自分の親の家もしくは〈キョーダイ〉の家が、最初の〈ムラシンルイ〉となるのである。ムラに家が誕生した時最初に〈ムラシンルイ〉となった家が、新しく出来た家の葬送をきっかけにしてイケダイと呼ばれる家となり、後から縁組をした〈ムラシンルイ〉とは区別されるのである。

先程、法事に招かれる単位は大まかにいえば家であると述べたが、厳密にいえば家又は〈カマド〉となる。婚姻を経て夫婦がひとつの単位となって始めて〈血の道の近い〉者の〈つきあい〉の場に登場し、例えば葬列に参加するのである。そして夫婦が、何らかの形で分居に伴なって生計の上で独立すると、家又は〈カマド〉の代表者として葬家の法事に招かれる事となる。

さて次に、葬列には不参加であったのに法事に招かれている者に関して問題となる点を述べたい。死者の嫡子の嫁の実家のあととりである Si、及び嫡孫の嫁の実家の当主 Yk は、葬列には加わずに一七忌日の客には招かれている。死者の〈血の道の近い〉者ではないが、葬家を単位としたシンルイとしての〈つきあい〉の場には登場してくるのである。この事からも、野送りの後に行われる法事には、葬家のシンルイと呼ばれる家、又は〈カマド〉の代表者が招かれるという側面がうかがわれるのである。

### その3〔見舞額〕

葬列には、原則として死者の〈血の道の近い〉者が個人単位で参加し、法事の客には葬家とシンルイ関係のある家、又は〈カマド〉が単位となっ

て招かれていた。続いて香典を持って来る者の範囲、及び単位を検討する。

見舞を持って弔問する〈ホカムラ〉の〈シンルイ〉は、法事の客と同様に家又は〈カマド〉をその単位とする。範囲は喪主からみて〈フルイシンルイ〉に入る者から、新しくシンルイとなった者までを含めて広い範囲の者が来る。しかし、見舞額に限ってみれば、喪主にとって〈フルイシンルイ〉や〈マワッタ〉関係にある者は、たとえ葬列に加わっていてもその額は少額である。これは葬家とシンルイ関係を結んでからの時間が経つにつれて〈つきあい〉の薄れてゆく様を示しているものと思われる。

IV-3表に、昭和11年没の  $S_2S$  と、その妻で昭和27年没の  $S_2N$  の見舞額を、シンルイに限って金額別に記した。死亡時期が16年ずれているので、貨幣価値の変動があるが、米1升の値段を付記してあるので注意してほしい。<sup>(29)</sup>

両人を見舞を参照すれば、死者の〈キューダイ〉よりも姻族である死者の子の嫁や、孫の嫁の実家が、高額を持ってきている事がわかる。特に79才の高齢で死亡した  $S_2N$  の見舞客の中では  $S_2N$  の〈キューダイ〉の見舞は最低で、ムラ一般のムラ見舞と同額である。その代りに、独立した孫が高額を持って来て上位にある事は、葬式を出し、かつ死者を送る立場にある喪主への贈与としての香典の意味がうかがえるのである。

### 〈フルイ・マワッタ〉

昭和42年没の同じ  $S_2$  家の次の世代の嫁  $S_2K$  の御見舞受納帳よりシンルイ<sup>(31)</sup>の見舞客を系図化した。(IV-8図参照)

調査時期より3年前に葬儀が行われている<sup>(32)</sup>。その時の喪主であった  $S_2$  家の当主に、見舞客の中から彼から見た〈フルイシンルイ〉と〈マワッタ〉者を指摘してもらった。

図から明確に読みとれるように、喪主を中心にしての〈フルイシンルイ〉<sup>(33)</sup>、及び〈マワッタ〉関係の者は全て最低の見舞額である。ムラビトの言葉のはしばしにのぼるシンルイの距離感を表現する〈フルイ〉、又は〈マワッタ〉関係と、香典額との対応は、その概念の正確さを証明してい



IV-3表

S<sub>3</sub> 家の見舞額 (シンルイ)

| 昭和11年 S <sub>3</sub> S 見舞               |              |                | 昭和27年 S <sub>3</sub> N 見舞                 |            |                |
|---|--------------|----------------|---|------------|----------------|
| 額<br>(銭)                                | 関 係          | 関係の詳細(村言葉)     | 額<br>(円)                                  | 関 係        | 関係の詳細(村言葉)     |
| 450                                     | DaHu         | コドモ            | 1000                                      | So         | コドモ            |
| 425                                     | So           | コドモ            | 800                                       | DaHu       | コドモ            |
| 140                                     | SiSoSo       | オイッコくムラウチ>     | 300                                       | SoSo       | マゴ             |
| 140                                     | SoWiBr       | あととりの嫁の実家      | 300                                       | SoSo       | マゴ             |
| 130                                     | SiSoSo       | オイッコ           | 290                                       | SoWiBrSo   | あととりの嫁の実家      |
| 130                                     | SiSoDaSo     | イケダイの家くムラウチ>   | 290                                       | SoSoWiFa   | マゴの嫁の実家        |
| 125                                     | WiBrDaSo     | 本家くムラウチ>       | 260                                       | SoDaHu     | マゴの嫁にいった家      |
| 90                                      | SoWiBr       | あととりのキョーダイ     | 260                                       | SiSoDaSo   | イケダイの家くムラウチ>   |
| 85                                      | BrSo         | キョーダイ          | 260                                       | BrDaSo     | 本家くムラウチ>       |
| 70                                      | Br           | キョーダイ          | 230                                       | SoWiBr     | あととりのキョーダイ     |
| 50                                      | SoWiMoBrSo   | あととりの嫁の母方のオンツマ | 200                                       | SiSoSo     | オイッコ           |
| 50                                      | SoWiBrWiBr   | あととりの嫁の実家の嫁の実家 | 200                                       | BrSoSo     | オイッコ           |
| 40                                      | WiSiSo       | キョーダイ          | 180                                       | BrSo       | キョーダイ          |
| 30                                      | SiSoDaSoWiBr | イケダイの家の嫁の実家    | 150                                       | BrDaSo     | 本家のあととりのキョーダイ  |
| ※ ムラ見舞は平均5銭+1升又は50銭<br>※ 米1升40銭で換算してある。 |              |                | 130                                       | SiSoSoSo   | オイッコくムラウチ>     |
|   |              |                | 100                                       | BrSo       | キョーダイ          |
|   |              |                | 100                                       | SoSoWiBr   | マゴの嫁の実家        |
|   |              |                | 100                                       | SoWiBrWiBr | あととりの嫁の実家の嫁の実家 |
|   |              |                | 100                                       | BrSo       | キョーダイ          |
|   |              |                | 100                                       | SiSo       | キョーダイ          |
|   |              |                | ※ ムラ見舞は平均10円+1升又は100円<br>※ 米1升80円で換算してある。 |            |                |
|   |              |                |   |            |                |
|   |              |                |   |            |                |
|   |              |                |   |            |                |

る。

続いて<フルイ>関係、及び<マワッタ>関係といわれる者を詳細に調べてみよう。どのような要素がシンルイの距離を左右しているのだろうか。

＜マワッタ＞関係の中の一部が＜フルイシンルイ＞となるので、先づ＜マワッタ＞関係から始める。

(1) 代替り<sup>(34)</sup>

S<sub>3</sub>F を中心として双系的に世代をさか上ると、父方、母方とも二世代上で sibling の関係で繋る者は、全て＜マワッテ＞いる。

例, a, b, c, d, e, h, i

また繋りを持ったシンルイが、sibling の関係で結ばれている世代より 2 世代下がっても＜マワル＞。例, j

＜マワル＞というのは相互関係である故、sibling で繋る時点からどちらかが一方が、二回代替りを重ねれば＜マワル＞といわれるのである。

留意したいのは、S<sub>3</sub> 家へ婚入した S<sub>3</sub> F の母親の実家のシンルイも、葬家のシンルイも、S<sub>3</sub>F から全く同じ縮尺で測られている事である。

(2) 姻戚 (Affinity)

S<sub>3</sub>F の姻族でありながら、＜キョーダイ＞、＜オンツァマ＞、＜オバツァマ＞、＜オイッコ＞、＜メイッコ＞、＜イトコ＞等の親族名称で呼ばれる者は、＜マワラ＞ないが、かれらを媒介として繋る関係は、全て＜マワッテ＞いる。

図をもって説明すれば、

a) 姻族であるキョーダイの繋り, k, l, m

b) 姻族であるオバツァマの繋り, o

c) 姻族であるイトコの繋り, n

となる。

代替りと姻戚が、上述の条件と合致する時、シンルイ間の距離を定める規準となり、＜マワッタ＞関係を選別するのである。

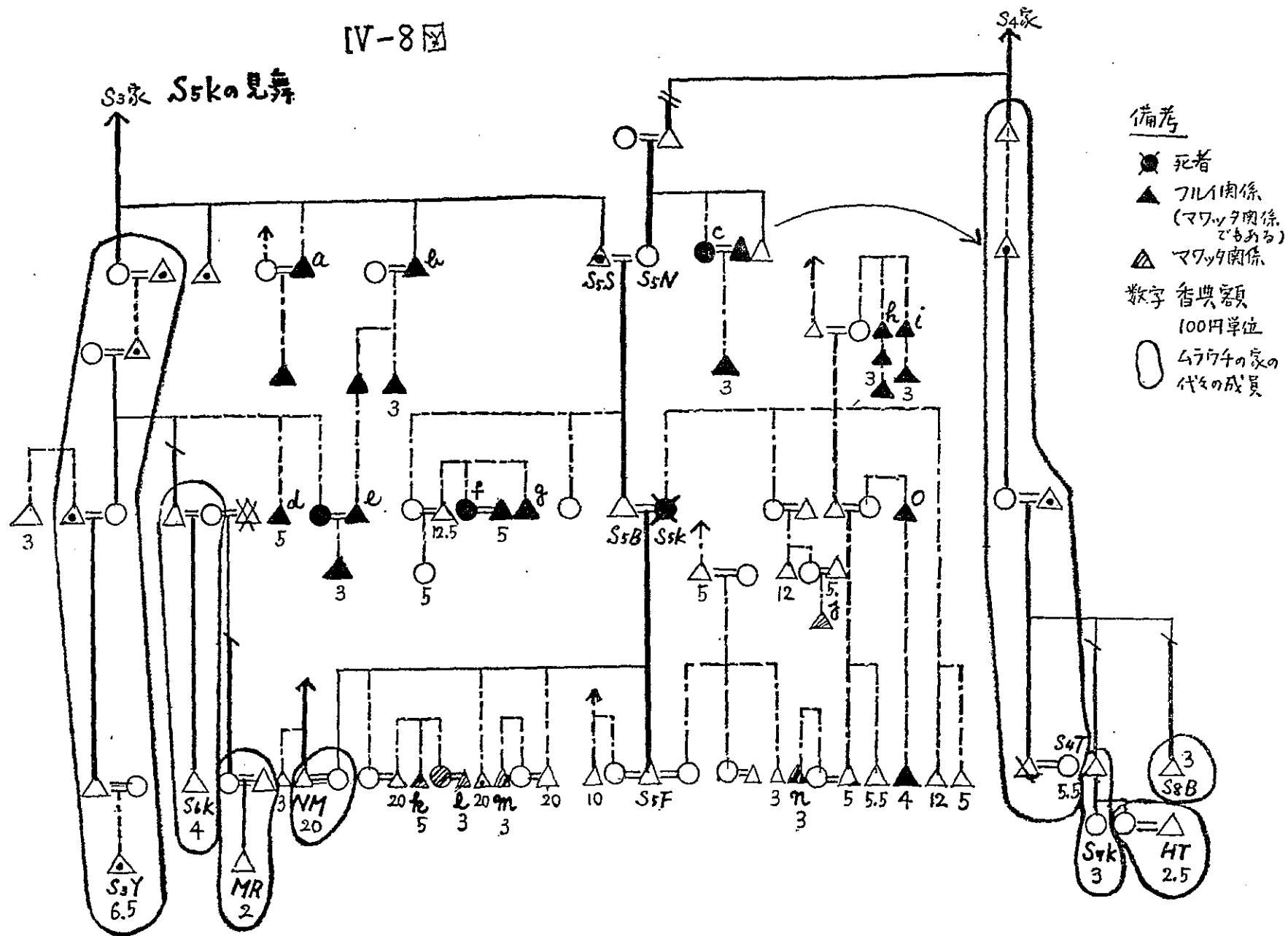
次に＜マワッタ＞関係の中から＜フルイシンルイ＞を捜すと、

1) 二世代さか上って sibling の関係で繋る者, a, b, c, d, e, h, i

2) 一世代前の sibling の affin で繋る者, f, g, o

の二種類がある。2) と同様に一世代前の sibling の関係で繋ってはいる

IV-8



が、jやnの場合は、S<sub>3</sub>Fの〈イトコ〉を媒介とした関係で〈フルク〉はない。

注

- (1) あととりで代を譲った前当主、又はその配偶者が死亡した場合を想定する。婚姻と異なり、葬送の慣行はあまり大きな変化がみられない。部分的な近年の変化は註に記す。
- (2) 血を分けた子供とその配偶者を指す。
- (3) 「縁(義理)のキョーダイでも、本当のキョーダイでも区別はつけねえ」といわれる。つまり、死者の sibling とその配偶者及び死者のつれあいの sibling とその配偶者を含む関係概念である。  
婚姻儀礼の項では、婚姻当事者の〈キョーダイ〉とは、sibling とその配偶者のみをさした。婚姻を契機として〈キョーダイ〉と呼ぶ者が増えて死ぬまで変らないのである。
- (4) 葬儀の際に、葬儀の一切をとりしきる役割をはたす人の事もイケダイという。〈イケダイ〉の家の当主は、野送りの際にはイケダイとなる。
- (5) 「死ぬとけがれていて、神様にも仏様にもなれねえ」といわれ、神棚は49日が過ぎるまでそのままにしておく。
- (6) 現在は一般の賄いをせずに赤飯の折を渡すので、見舞客の訪れる時刻も、午後1時頃の出棺に間に合う程度に遅くなってきた。
- (7) 葬列につく人の持物の一種。
- (8) これが告別式にあたる。今では葬家で引導渡しを済ませてしまう事もある。
- (9) 参列者の詳細な分析は46頁参照。
- (10) 墓に持っていく物は「ノウ野飯」、茶、水、菓子等、決っており、持つ人も葬列順に従って決まる。
- (11) 今では49日に中陰の忌払いをせずに、7日早い35日に行く。
- (12) 50回忌まで行う事は少なく、大体33回忌があげ法事となり、餅をついて祝う。
- (13) スキ(暇)だから、秋には行わずに春の彼岸にやるという。
- (14) 下村の成員は、皆寺内部落(隣ムラ)にある泉福寺の檀徒である。
- (15) 例えば死者の〈キョーダイ〉の家のあと取り。
- (16) ウブヤアゲともいわれる。誕生の祝い。
- (17) 吸物、露物、小井、肴、皿、平の献立の馳走が、少なくとも15人前、多ければ50人前位用意される。

- (18) 手伝いで忙しいので「入れ膳」といって、膳を家まで届けてもらう。
- (19) Ⅲ章注(19)参照。
- (20) 現在は「一家代」もしくは「一家台」と記される例が多い。もともとは「生台」であったが、一家を代表するという意味で「一家代」と書くようにと山都町の人が指導したという話もある。
- (21) 縁網<sup>エンツ</sup>ともいう。
- (22) ここでは  $O_2I$  が  $O_2S$  より一世代下である事つまり死者の世代が下がった事を指す。一般的には、死亡もしくは隠居によって当主の座を息子に譲った場合をさす。
- (23) 下村に於いて血縁のある本分家に用いられる「カッテ」、「インキョ」という本分家名称では、呼ばれていない。
- (24) シンルイの距離感を表現するムラ言葉。概略は 23 頁参照。詳細は 59 頁参照。
- (25) 本稿で距離という言葉を用いる場合は、親等で数えられる客観的な指標の上に立っているものではなく、ムラビトの感じている遠近の意味である。ムラビトの感じる距離は本稿が進むにつれて定義される。
- (26) 孫は必ずしも参列しなくてよい。
- (27) 52頁に<キョーダイガカリ>の事例有。
- (28) 「ふたつかマドさげると大変だ」という言葉にうかがえるごとく、生計上の分離の意味が強調されている。<カマド>に関しては、更なる調査が望まれる。
- (29) <ホカムラ>の<シンルイ>の見舞は、「親見舞は1斗、キョーダイはその半分の見舞、オイッコは $\frac{1}{3}$ 」といわれる。
- (30) ムラウチの家、又はカマドは全て香典を葬家に持ってくるが、葬家とシンルイ関係にないムラ一般の見舞は香典の中でも最も少額である。
- (31)  $S_2$ 家の現在の当主が「タシン（他人）だ」といわずに、関係を述べてくれた者を指す。紙面の都合上、全く同様な関係のごく一部を略した。
- (32) 3年間の間のシンルイの変動は考慮する必要のない程微細である。
- (33) 但し、ホカムラのシンルイに限る。
- (34) IV章注(22)参照。

## V ムラシンルイ

下村のある家の成員が結婚をし、分出して、部落内に「一家を創設」した場合、その新しい家にとっての<ムラシンルイ>は、いつ、どのように

して決まるのだろうか。それは、どういう関係にもとづくのだろうか。

一人のムラ人に、彼の家が「分家」した時のことを想い出してもらってたずねると、「別にムラシンルイのつきあいしようという具合に、語<sup>・</sup>り<sup>・</sup>あ<sup>・</sup>って決めることはない」という。ただし、タノマレシンルイのような場合は例外である。(24頁参照)。又、別の人には、或る新しく創設された家の人が亡くなったとき、「ムラシンルイとして手伝いに来て下さい」という「つかい」が来たので、それに応じた、だから〈ムラシンルイ〉なのだろうといった。しかし、「つかい」を出してすんなりと受け入れてもらうためには、シンルイづきあいをすべきだ、乃至は、つきあいをしてもよいという、「つかい」を出す方と受ける方の両者に共通した、家同士の関係のとらえ方の規範がありそうである。これは「一家を創設」した場合に限ったことではない。幾世代にもわたってムラウチの縁組を繰り返し、又、最近の約百年間に九戸もの新戸を分出させてきたのである。いわばムラ中シンルイのようなものである。ムラ人はその中から、〈ムラシンルイ〉はどこどこことというように類別する。〈つきあい〉の分析を通じて、それを確かめることもできる。このようにシンルイの中でも〈ムラシンルイ〉として何世代にもわたって〈つきあう〉、その基礎となっている原理を本章で明らかにしたい。

#### その1〔キューダイからムラシンルイへ〕

手掛かりとして、前章の最後に分析した、見舞額を検討することからはじめる。IV—8図の中で、〈ムラウチ〉の家<sup>・</sup>の各世代の当主及びその配偶者を、線で囲んで示した。

〈ムラウチ〉で不幸があれば、〈ムラウチ〉の家又は〈カマド〉はすべて、「ムラ見舞」として、米1升相当を持ってくるといわれる。その中で〈ムラシンルイ〉は、米2升。見舞に関しては、〈イケダイ〉も、他の〈ムラシンルイ〉と何らかわるところがなく2升である。ただし、死者と<sup>(1)</sup>〈血の道の近い〉関係にある〈ムラシンルイ〉は、その分だけ見舞額が増

えるのはいうまでもない。

S<sub>3</sub>Kの葬儀の際のムラ見舞は、100円+1升≒250円見当であった。(61頁、IV—8図参照) S<sub>3</sub>家の<ムラシンルイ>となっているのは、「本家」のS<sub>3</sub>T、<sup>(2)</sup><イケダイ>のS<sub>3</sub>Y、及び当主にとって<キューダイ>のNMである。この三者の香典額は、S<sub>3</sub>TとS<sub>3</sub>Yが、ムラ見舞の2倍の額であるのに対して、NMは「親見舞」として、ムラ一般の約8倍の額を持ってきている。NMの例でわかるように、<ムラウチ>でも、死者の<血の道の近い>者は、<ホカムラ>と同じ基準に従って、見舞を持って来る。

<ムラシンルイ>といってもフルイ・マワった関係にある、S<sub>3</sub>T、S<sub>3</sub>Yは見舞額も少なくなる。しかし、<血の道の近い>者と比較して額の少なさに注目するより、むしろ、<ホカムラ>ならとくに<つきあわ>なくなっている関係であるにもかかわらず、なお米2升の安定した<つきあい>を継続している点に<ムラシンルイ>の「特殊性」を見出すべきである。

<ムラシンルイ>の<つきあい>の安定性について。——S<sub>3</sub>Fは、「ムラウチのシンルイは、フルクはならねえわい」「ムラウチでマワったとは、あまりいわねえ」という。一方、O<sub>4</sub>T老は「ムラウチでもマワル」と話した。(23頁参照)。両者の食い違いをみてみよう。

<ムラウチ>の場合は特に、<血の道の近い>関係か、マワった関係か、ということが、<つきあい>に格段の差を与える。法事の席順、葬送順、香典、祝言のつきあい(見参から相伴へ)等、どれをとってもマワったとたんに<つきあい>は薄くなるのである。従って、マワリたての<ムラシンルイ>を念頭に置いて語っている場合は、マワっているか否かは重大な問題となる。それがO<sub>4</sub>T老の言葉にあらわれたのだといえよう。

ところが、<ムラシンルイ>は、ひとたびマワれば、後何度代替りを重ねようとも<つきあい>は減らない。そこに安定しているといえる根拠がある。S<sub>3</sub>Fにとって、S<sub>3</sub>Yも、S<sub>3</sub>Tも、とっくの昔にマワ

った〈ムラシンルイ〉で、今更マワッている等というと奇妙に聞こえるのだと思われる。あるいは、マワッタ、フルイという語は、〈つきあい〉が薄くなり、結局は切れてしまうという意味合いを含んでいるので、安定した〈つきあい〉をする〈ムラシンルイ〉には、あてはめられないのかもしれない。

S<sub>3</sub>Y, S<sub>4</sub>Tが〈ムラシンルイ〉としての〈つきあい〉をしているにもかかわらず、フルサでは、それらとかわらないS<sub>6</sub>Kは、〈ムラシンルイ〉であるとはいわれていない。(S<sub>3</sub>YはS<sub>6</sub>Kよりも、更に一世代マワッている点に注意。) 事実、S<sub>6</sub>Kは、〈ムラシンルイ〉の香典額をもってきていない。ムラ一般よりわずかながら多い程度である。S<sub>6</sub>Kの例は、〈ムラシンルイ〉とムラ一般の中間の〈つきあい〉の型があることを示している。そこで、昭和11年から、昭和42年の間の、S<sub>5</sub>家の〈ムラウチ〉の見舞の移り変わりを、次に検討する。

S<sub>5</sub>家に、系図上繋りを持つ家のうち、8軒をあげ、各家の見舞額の変遷を表にまとめ、更に、死亡特別の系図を添えた。それぞれの時のムラ一般の見舞額（およその平均値）に比べて、多額の見舞を持ってきた者には、丸印をつけてある。チェックは一七忌日の客に呼ばれた者を示す。

全体を通じて、四通りの香典額の推移の仕方が見られる。

- (1) ムラ一般の見舞額を、一定して持って来る者……M家, S<sub>7</sub>家, S<sub>8</sub>家, H家
- (2) ムラシンルイとしての見舞額を、一定して持って来る者……S<sub>5</sub>家, S<sub>4</sub>家
- (3) 新しく、シンルイになった者として、死者との関係に即して持って来る者……N家
- (4) 額が、漸減する者……S<sub>6</sub>家

まず、(1)についてみると、M家は昭和11年S<sub>3</sub>Sの葬儀には、MCの名で香典をもってきている。ムラ一般と同額である。もし、M家が〈ホカム

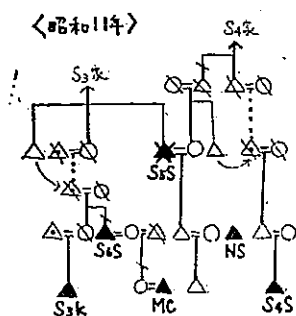


V-1表 S<sub>5</sub>家のムラ見舞の変遷

| 死亡者名             | S <sub>5</sub> S没        |        | S <sub>5</sub> F没         |        | S <sub>5</sub> B没         |        | S <sub>5</sub> K没         |   |
|------------------|--------------------------|--------|---------------------------|--------|---------------------------|--------|---------------------------|---|
| 死亡年              | 昭和11年                    |        | 昭和27年                     |        | 昭和36年                     |        | 昭和42年                     |   |
|                  | ※                        | 〈銭〉〈升〉 | ※                         | 〈円〉〈升〉 | ※                         | 〈円〉〈升〉 | ※                         |   |
| S <sub>5</sub> 家 | S <sub>5</sub> K<br>50+2 | ○      | S <sub>5</sub> K<br>100+2 | レ      | S <sub>5</sub> K<br>200+2 | レ      | S <sub>5</sub> Y<br>200+3 | レ |
| S <sub>6</sub> 家 | S <sub>6</sub> S<br>20+3 | ○      | S <sub>6</sub> K<br>50+1  | レ      | S <sub>6</sub> K<br>100+2 | レ      | S <sub>6</sub> H<br>100+2 | ○ |
| M家               | MC<br>20                 |        | MC<br>30                  |        | MR<br>10+1                |        | MR<br>200                 |   |
| N家               | NS<br>5+1                |        | NM<br>20+3                | レ      | NM<br>200+10              | レ      | NM<br>2000                | レ |
| S <sub>4</sub> 家 | S <sub>4</sub> S<br>5+3  | ○      | S <sub>4</sub> S<br>100+2 | レ      | S <sub>4</sub> S<br>100+3 | レ      | S <sub>4</sub> T<br>100+3 | レ |
| S <sub>7</sub> 家 |                          |        |                           |        | S <sub>7</sub> S<br>100   |        | S <sub>7</sub> K<br>300   |   |
| S <sub>8</sub> 家 |                          |        | S <sub>8</sub> B<br>100   |        | S <sub>8</sub> B<br>100   |        | S <sub>8</sub> B<br>300   |   |
| H家               |                          |        | HT<br>10+1                |        | HT<br>10+1                |        | HT<br>100+1               |   |
| ムラ見舞平均           | 5銭+1升 or 20銭             |        | 10円+1升 or 100円            |        | 10円+1升=130円               |        | 100円+1升=250円              |   |

※ 一七忌日の法事に招かれた者    レ, シンルイ並みの香典を持ってきた者    ○

V-1 図



V-3 図

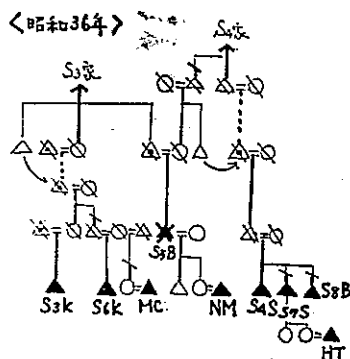
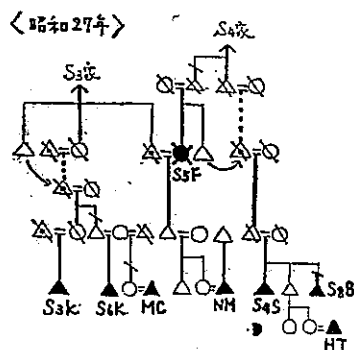
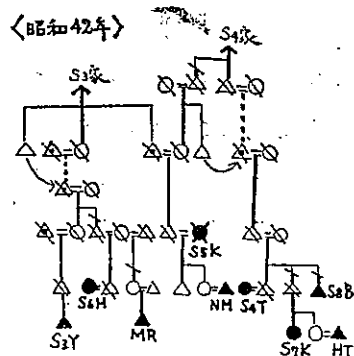


図-2 図



V-4 図



ラ〉の家であったなら、〈マワッ〉たといわれる関係である。しかし、「タシン」(他人、シニルイではない)とはいえない。このようなとき、〈ホカムラ〉ならば、最小額の香典を持ってくるか、さもないれば〈つきあい〉は全くない。それが、ここでムラ一般と同額であるということの意味は、一つには、後者の、〈つきあい〉が全くない状態を示しているともいえる。他方、下村では、系譜を辿れば「ムラ中シニルイみたいなものだ」といわれ、マワッタ関係は、とりたててシニルイとして意識されないのだ、ともいえる。

つぎに、先に提起した、ムラ一般と〈ムラシンルイ〉の中間の型を示す、(4)の例についてみる。昭和11年には、死者の〈オイッコ〉にあたるS<sub>0</sub>Sの名で見舞をもってきている。「オイッコは3升」という、〈ホカムラ〉との〈つきあい〉を通じてみた規範と合致している。昭和27年には、この間にS<sub>0</sub>家で代替りをしたので見舞額が減少している。しかし法事の客には、S<sub>0</sub>Sの名で招かれる。昭和42年の葬儀は、S<sub>0</sub>家の死者の世代も1世代下がっている。このため、S<sub>0</sub>家の当主との関係はマタイトコとなり、法事にも招かれなくなる。

これに対し、死者からの親族の距離としては、S<sub>0</sub>家の代々の当主と同じ点に位置しているS<sub>0</sub>家は、代替りと無関係に〈つきあい〉は一定している。つまり〈ムラシンルイ〉としての〈つきあい〉をしているのである。S<sub>0</sub>家が〈ムラウチ〉の〈シンルイ〉としての〈つきあい〉をやめていった理由はどこにあるのだろうか。ここで、IV章で述べた、〈キョーダイ〉、〈オイッコ〉の区別を想起してみよう。甥（又は姪の配偶者）は〈つきあい〉の場に〈オイッコ〉として登場する。〈オンツァマ〉—〈オイッコ〉の〈つきあい〉が当人同士の関係にもとづくものであるのに対し、例外的に、〈キョーダイ〉の資格を継承する甥（又は姪の配偶者）が存在する。〈ムラウチ〉の〈シンルイ〉が固定化される関係と、そうでないものとに区別される基準が、〈ムラ〉の内外を問わない〈つきあい〉の場での〈キョーダイ〉、〈オイッコ〉の区別によっているのは、すでに明らかである。鍵は、資格を継承する者とそうでない者との区別にある。

S<sub>0</sub>SはS<sub>0</sub>家の長男であったが、姉が長子としてS<sub>0</sub>家を継いだ。そのため、S<sub>0</sub>Sは「一家を創設」したのであり、父の代わりに、S<sub>0</sub>S (S<sub>0</sub>F) の〈キョーダイ〉の資格では〈つきあい〉に参加することはできないのである。これに対しS<sub>0</sub>家を継いだ姉（の配偶者）は〈キョーダイ〉の資格を継承する。その子供の代になると、もはや、〈キョーダイ〉の資格で〈つきあい〉に参加することはないが、資格を継承するという原理はそのまま残され、あとの子供が〈ムラシンルイ〉の当主として〈つきあい〉に

(3)  
参加することになる。

このように、〈ムラ〉の内外を通じてみられる〈キョーダイ〉という関係の特質（〈オイッコ〉と比較することにより明らかになる<sup>(4)</sup>）を、何代にもわたって、一人のあととりが継承してゆくのが〈ムラシンルイ〉である。Aにとっての〈キョーダイ〉がBであるなら、その逆も同じ〈キョーダイ〉である。従って〈ムラシンルイ〉もお互いにとってそうである。

いま検討した、 $S_2$ 家と $S_3$ 家の〈ムラシンルイ〉としての関係は、 $S_2$ 家より $S_3$ 家への婿入りという、村内婚を契機として結ばれた。 $S_2$ 家とN家も村内婚で結ばれた。この関係も、今後何代にもわたって〈ムラシンルイ〉であろう。ただし、あととり以外の者が形成する家は、たとえ〈ムラウチ〉でも〈ムラシンルイ〉として固定されないのは、先に述べた通りである。

$S_2$ 家の、もう一軒の〈ムラシンルイ〉 $S_4$ 家の場合は、婚姻を契機にして結ばれたのではなく、分出がその契機となっている。 $S_4$ 家は $S_2$ 家の「カッテ」（本家）と呼ばれ、 $S_3$ 家は $S_4$ 家の「インキョ」（分家）と呼ばれる。分出がその契機になったとしても、〈キョーダイ〉の〈つきあい〉からはじまり、〈ムラシンルイ〉へと固定化される原理は、村内婚の場合と全く変らない。

分出が契機となって〈ムラシンルイ〉となる場合、分出とは、単に $S_2$ 家・ $S_3$ 家のごとく、「本家」「分家」といわれる場合をさすだけではない。たとえば、 $S_3$ 家から $S_4$ 家が分居して独立し、「一家を創設」<sup>(5)</sup>した場合も含んでいる。sibling を媒介とした関係であることには、変りがないのである。

## その2〔エングミ〕

ムラ一般以上の〈つきあい〉はしていても、それが固定化されずに、切れてゆく関係として、〈オンツァマ〉—〈オイッコ〉の関係にもとづく場

合があることを見てきた。この他にも、切れてゆく関係はないだろうか。

S<sub>3</sub>家の、御見舞受帳にみられる、A<sub>2</sub>家、及びS<sub>6</sub>家との〈つきあい〉をみてみよう。関係者は系図に示した通りである。S<sub>3</sub>家の息子と、A<sub>2</sub>家の娘が結婚してS<sub>6</sub>家を「創設」している点に注意してほしい。(結婚は明治43年)。

A<sub>2</sub>家は、明治22年には、ムラ一般の〈つきあい〉である。大正1年、S<sub>3</sub>Sの曾祖母の葬儀と、大正13年のS<sub>3</sub>Sの祖母の葬儀には、〈ムラシンルイ〉の〈つきあい〉に相当する見舞額を持ってきている。しかし、昭和15年のS<sub>3</sub>Sの葬儀の際は、ムラ見舞と同額に戻り、S<sub>3</sub>家とのシンルイづきあいが切れていることを示す。

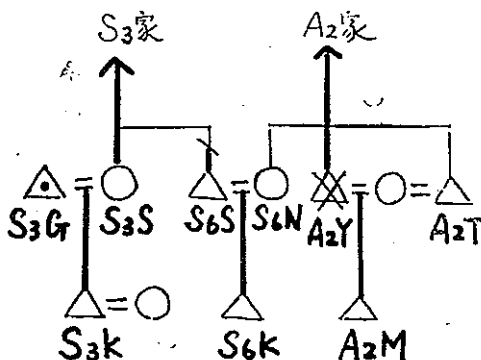
一方、S<sub>6</sub>Sは、大正13年の祖母の葬儀には、〈ムラシンルイ〉並みの見舞を届けている。昭和15年に姉が死亡した際は、〈キューダイ〉の見舞額である。S<sub>6</sub>家とS<sub>3</sub>家は、代々、〈ムラシンルイ〉として〈つきあう〉ことが予想される。

A<sub>2</sub>家の香典が変化している理由をみてみよう。明治22年から大正1年の間に、A<sub>2</sub>家とS<sub>3</sub>家との間で婚姻が成立し、花嫁、花婿にとっての実家同士の関係となった。それゆえマワッてはいるが、ある程度の〈つきあい〉はする。昭和15年には、S<sub>3</sub>家、A<sub>2</sub>家共に代替りしたことが理由で、シンルイづきあいをやめている。

A<sub>2</sub>家とS<sub>3</sub>家の者はaffinを介してのマワッた関係にある。その場合、〈ムラウチ〉という条件が入ると、〈つきあい〉の変化の仕方はどうなるのかについては今、香典額の変化として把握した。それをムラ言葉で表わすとどうなるのだろうか。

〈エングミ〉という語の与えられる関係の変遷をみてみよう。現在、A<sub>2</sub>家とS<sub>6</sub>家とは〈エングミ〉のあった家といわれている。S<sub>3</sub>家とS<sub>6</sub>家についても同様に、〈エングミ〉あったといわれる。<sup>(6)</sup>ところが、大正1年、同13年の頃のように、S<sub>3</sub>家の葬式にA<sub>2</sub>家がシンルイ並みの香典を持ってきている時点では、S<sub>3</sub>-A<sub>2</sub>の〈エングミ〉といわれていたものと推定され

V-5 図



V-2 表

|                  | 明治22年            |     | 大正1年             |         | 大正13年            |         | 昭和15年            |                         |
|------------------|------------------|-----|------------------|---------|------------------|---------|------------------|-------------------------|
| A <sub>2</sub> 家 | A <sub>2</sub> Y | 2 銭 | A <sub>2</sub> Y | 10銭+2 升 | A <sub>2</sub> T | 10銭+2 升 | A <sub>2</sub> M | 10銭+1 升                 |
| S <sub>6</sub> 家 | ムラ一般の見舞平均        |     | 明治43年婚姻          |         | S <sub>6</sub> S | 10銭+2 升 | S <sub>6</sub> S | 50銭+<br>150銭<br>(3升の米代) |
|                  |                  |     | 1 銭+1 升          |         | 20 銭             |         | 10銭+1 升          |                         |

る。というも現在ムラに、独立して1代目の村内婚の例がみられ、その例では、夫婦それぞれの、実家同士の〈エングミ〉といわれているからである。

ここでみたように、sibling の配偶者の sibling との〈つきあい〉は、〈オンツァマ〉—〈オイッコ〉の関係が切れていくのと同様に切れてゆくのである。それは〈エングミ〉という語があてはめられる関係の推移によっても、裏付けることができる。

ところで、「縁組」という語は、婚姻関係を表わすものとして、慣用化されている。下村でも、そのような用語法もある。上に述べてきたのがそ

の例である。しかし、実際に婚姻関係があったか否かについて知らない時でも、「エングミあったんでねえべか」といわれる。その時には＜ムラシンルイ＞として＜つきあい＞をしているゆえに、＜エングミ＞あったといわれるのである。(Ⅱ章24頁参照)。

＜エングミ＞という語が、＜つきあい＞の有無によって使用されるようになると、いかなる契機で＜ムラシンルイ＞関係がはじまったのかについて全く問われなくなる。われわれが、発生の契機を本家—分家、村内婚、一家創設という基準で分類せずに、＜キューダイ＞というムラ人の概念で、統一的に把握しようと努めたのも、そのためである。

タノマレシンルイについては、その根拠づけとして、＜エングミ＞あったとはいわれない。また、系譜関係の不明な＜イケダイ＞に関しても＜エングミ＞は適用されない。しかし、それ以外の＜ムラシンルイ＞は、すべて＜エングミ＞として説明されるのである。「チチマツダイのシンルイ」(「本家」—「分家」関係、下村でいう＜イケダイ＞のことをさす)といひながら、同時に＜エングミ＞あったからともいわれるのである。いわば＜エングミ＞は、二つの家の当主(当主が入り婿である場合はその妻)同士が代が経ったとしても、血縁関係で結ばれていることを示すものである。但し、養子をとってあとを継がせた場合でも、擬制的血縁関係として＜エングミ＞は適用される。

＜エングミ＞が血縁関係と結びついているなら、ムラ中＜エングミ＞ということになりかねない。しかし、あくまでも現在＜つきあい＞のある家関係を説明するための語であることに、注意しなければならない。そして＜ムラシンルイ＞としての＜つきあい＞を、代々継続するかどうかの選択の基準は、まだフルクも、マワッてもいない段階で、＜キューダイ＞、＜オイッコ＞の区別として、すでに萌芽的に見ることが出来る。＜キューダイ＞、＜オイッコ＞の区別は、あととりが1人のみであるともいいかえられる。従って数世代を経た＜ムラシンルイ＞関係の片方から、新たに分出した者は、自分の生家の＜ムラシンルイ＞とは全くつきあわない。(＜オ

イッコ〉とちがい、〈血の道〉も決して近くないからである。)

このように〈ムラシンルイ〉は当初は〈キョーダイ〉のうち、フルクなり、マワルと、〈エングミ〉のあったうち、として説明されるのである。

なお、つけ加えておくと、たとえ〈キョーダイ〉でも、〈キョーダイガカリ〉のように、同居し、生計を共にしている場合や、単に〈カマド〉(57頁参照)をわけただけの、一軒の家として独立しない段階では、互いに〈ムラシンルイ〉であるとはいえない。しかし、〈キョーダイ〉の中でもあととりは、すでに決まっており、あととりでない者の家族は、近い将来独立することが予定される。もし〈ムラウチ〉に独立したならば、〈ムラシンルイ〉となるのは当然である。

### その3〔事例〕

ここにあげる、Sociogram と、系図とを参照してもらえば、〈ムラシンルイ〉の系譜関係をみることができる。

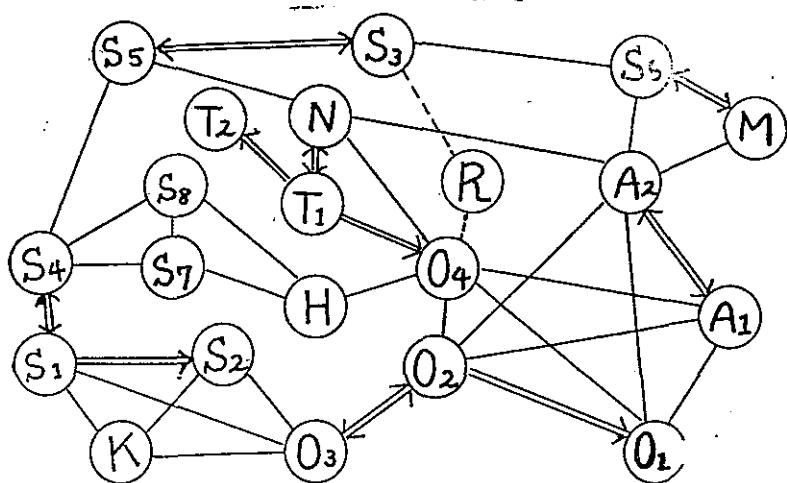
O<sub>2</sub>家とA<sub>2</sub>家とは〈オンツァマ〉—〈オイッコ〉の関係であったが、〈ムラシンルイ〉である。O<sub>1</sub>家とO<sub>1</sub>家についても同様である。これは、A<sub>2</sub>家、O<sub>1</sub>家の分出の事情に影響を受けているものと思われる。すなわち、どちらも長子であるにもかかわらず、あとをとらなかった。A<sub>2</sub>家の場合家屋を相続し、本家であるA<sub>1</sub>家が別の家屋に移った。O<sub>1</sub>家は〈キョーダイガカリ〉(57頁参照)で、長期間O<sub>2</sub>家と同居していた、等の事情が考えられる。

S<sub>2</sub>家とH家も〈オンツァマ〉—〈オイッコ〉である。しかし、同じ関係にあるS<sub>1</sub>家とH家が〈ムラシンルイ〉ではない(S<sub>1</sub>家はすでに代替りをし、イトコ同士の関係となっている)のを見てもわかるように、代替りをすれば、〈ムラシンルイ〉としての〈つきあい〉はなくなると思われる。

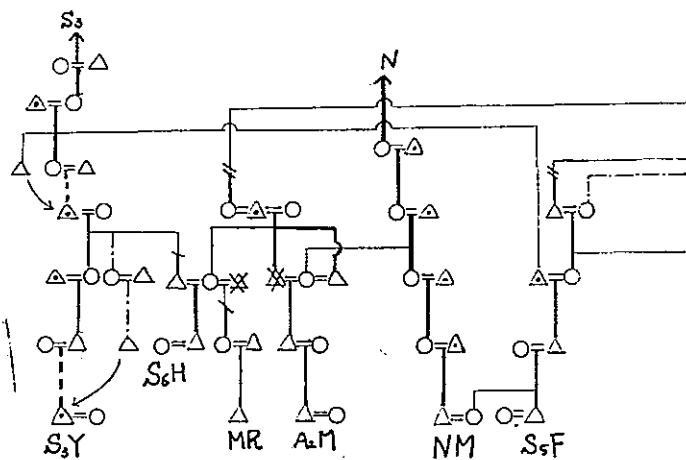
〈キョーダイ〉といっても、嫁(婿)にいったもの、分出したもの、同士の間では〈ムラシンルイ〉となることができるのだろうか。O<sub>1</sub>家とA<sub>2</sub>家は〈ムラシンルイ〉となっているが、先に述べた事情もあり、一般化す



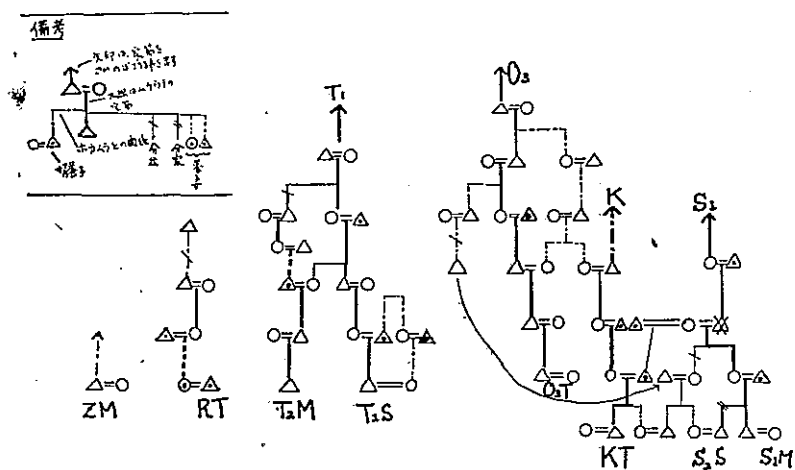
V-6図



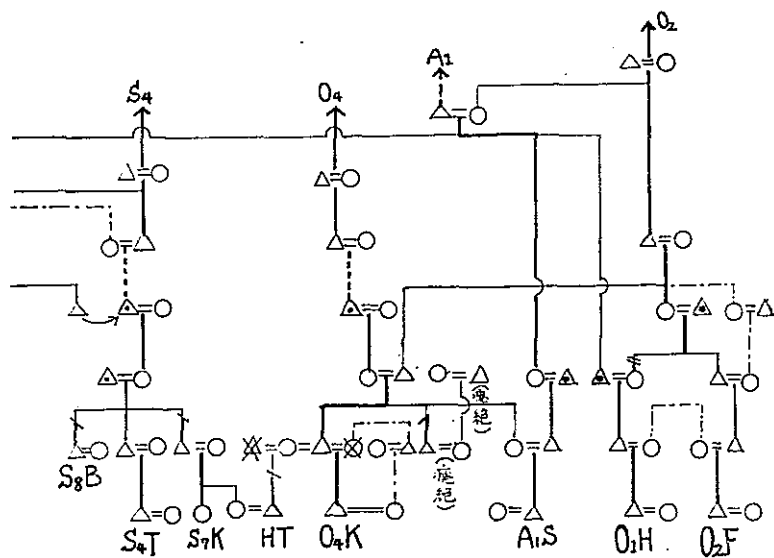
V-7図(1)



V-7図(3)



V-7図(2)



ることはできない。 $S_7$ 家と $S_8$ 家は、まだ、〈血の道の近い〉者同士であり、今後固定的な〈ムラシソルイ〉として〈つきあう〉か否かは、不明である。

$O_3$ 家とK家は、村外から、姉妹を嫁にもらった家同士の関係である。この点についても、他に例を見ない( $S_4$ ・ $S_5$ 、 $O_1$ ・ $O_2$ は、この条件がなくても、すでに〈ムラシソルイ〉である)ので、一般化することはできない。

村内に、移住乃至分出して、「一家を創設」した場合(Kもその例である)、その直後は積極的に〈ムラシソルイ〉をふやす傾向にあるものと思われる。 $S_4$ 家は $S_2$ 家にとって「本家」( $S_1$ )の「イケダイ」である。一般に、このような関係にある時は、〈ムラシソルイ〉となることは、ありえない。しかし、「分家」直後の $S_2$ 家で葬儀があったとき、 $S_4$ 家に〈ムラシソルイ〉としての手伝いを頼んだという。

なお、祝儀帳・香典帳における、〈ムラウチ〉の〈つきあい〉の変遷をみると、何世代にもわたって、安定した〈つきあい〉をする〈ムラシソルイ〉にも、変遷があることがわかる。〈イケダイ〉、タノマレシソルイを除いた〈ムラシソルイ〉の中で、系譜関係の不明な例は1例( $O_3$ ・ $S_1$ )のみである。とすると、我々が辿り得る数世代以前に、〈ムラシソルイ〉関係を結んだ者は、今は切れてしまっているのである。

#### 注

- (1) 堰沢の部落に実家のあるムラビトは、「このムラじゃ、なんだかイケダイの見舞は少ないんだから。堰沢じゃイケダイは米五升だ」という。
- (2)  $S_5$ 家にとって、「本家」と〈イケダイ〉が別箇にあることの理由は、II章20頁参照。
- (3) 〈ムラウチ〉の〈キョーダイ〉を、ムラシソルイとして意識しながらつきあうのか、それともキョーダイとしてつきあうかについて質問してみた。答えは「ムラシソルイはそこ(キョーダイ関係)からきてんだ」というものだった。
- (4) 〈オイッコ〉〈メイッコ〉に関していえば、「オイッコ(メイッコ)の家」と呼ばれることはなく、資格の継承は行われない。〈オイッコ〉という親族名称は、個人に与えられたもので、〈マワレ〉ば〈つきあい〉をやめようということになる。〈ホカムラ〉、〈ムラウチ〉を通じて、この原則はかわらな

い。

- (5) S<sub>5</sub>Sは、S<sub>3</sub>家で嫁を迎え、後に独立した。独立の際には、S<sub>3</sub>家より土地・建物等の財産を分割してもらわなかった。なお、「結婚してから分家に出るのが、こちらでは普通」といわれている。
- (6) S<sub>6</sub>家は、S<sub>3</sub>家と同じS姓を名乗っている。このため、A<sub>2</sub>—S<sub>6</sub>については〈エングミ〉という語が、ムラ人の口から自然に出てくる。これに対し、S<sub>3</sub>—S<sub>6</sub>については、〈エングミ〉というよりも、S<sub>3</sub>から独立したのだという意味あいの言葉が多くきかれる。しかし、ムラの中でも高年令層の人は、「嫁娼、双方の実家と、新しくできた家との間の〈エングミ〉」という表現を奇異に感じないようである。重要な点であるので、今後の確実な調査が要請される。

## VI 要約と結論

ムラ人の、「ムラシンルイは、物事があったときにつきあう」という主旨の言葉は、本稿の記述と、方法に、方向づけを与えてきた。その際、物事というのは、特に、結婚・死亡の二つの事件をさしていた。

祝言・葬式にみられる〈つきあい〉を、〈ムラシンルイ〉に限らず、広い視野でみたところ、〈つきあい〉には三本の軸——血の道・ムラシンルイ・ムラウチ——の存在する事が、明確になった。従って、〈ムラシンルイ〉との〈つきあい〉の意味も、〈つきあい〉の場における〈血の道〉〈ムラウチ〉の意味するものとの関連の中で、相対的に見出す必要があると思われる。

〈血の道〉は個人が単位となった関係づけの仕方であるのに対し、〈ムラシンルイ〉は家が単位となっている。(〈ムラウチ〉も、この点では〈ムラシンルイ〉と同様である。)個人から家へと、単位が変化してゆく接点として〈キューダイ〉の概念が重要である。〈キューダイ〉は、確かに〈血の道〉の原理に支えられている。しかし、同時に sibling のあととりのみが〈キューダイ〉の資格を継承しうるという点にみられるように、家が単位となった〈つきあい〉の性格を、萌芽的に持っている。〈ムラシンルイ〉の継続性も、資格の継承という〈キューダイ〉の性格に基礎がある。

このように、特殊な性格をもつ＜キョーダイ＞の＜つきあい＞の起点は、祝言の儀礼の中に見出すことができる。＜床柱をしょう＞者と、当事者との関係を想起してみる。第1子の結婚の場合、迎え見参で＜床柱をしょう＞のは、父方・母方の＜オオオンツァマ＞＜オオオバツァマ＞である。そして見参の席では、婚入する嫁（婿）（第一子への婚入であるから、婚出する者は第二子以下のはずである）の＜アンツァマ＞＜アネサマ＞が＜床柱をしょう＞。この祝言で承認された夫婦は、将来＜オオオンツァマ＞＜オオオバツァマ＞の死に際して、＜キョーダイ＞の資格で＜つきあう＞事ができる。嫁（婿）の＜アンツァマ＞＜アネサマ＞とも、当然＜キョーダイ＞として＜つきあう＞。このように、祝言は＜キョーダイ＞の＜つきあい＞が開始することを、確認する場ともなっているのである。

結婚前は、＜人になんねえ＞者として、＜つきあい＞に参加することができない。自分の祝言の時にはじめて、＜つきあい＞の場に参加する事を承認されるのである。そして以後、＜血の道の近い＞者に物事があれば＜つきあう＞。自分の死によって、＜つきあい＞の場から消えるまでの間＜つきあう＞＜血の道の近い＞者は、自分の世代をはさんで、上下一世代<sup>(1)</sup>づつに限られる。

ところで死者にとっては＜血の道の近い＞者であっても、今生きている死者の直系卑族にしてみれば、＜フルイシンルイ＞であり、時には、全くつきあいが切れている。葬<sup>・</sup>列<sup>・</sup>に並ぶ者が、死者の＜血の道＞であったとしても、香典を多く持ってくるのは、相続人にとって、近い者である。いわば、新しいシンルイともいえるわけである。

新しいシンルイとは、物事の＜つきあい＞をするだけではない。日常の交際もある。われわれが、＜ムラシンルイ＞の意味づけを、下村におけるつきあい一般の中で、相対的に見出そうとするなら、今後日常の交際にも視野を拡げる必要がある。

結婚から死亡までの＜つきあい＞の場で、表に立つのが＜血の道の近

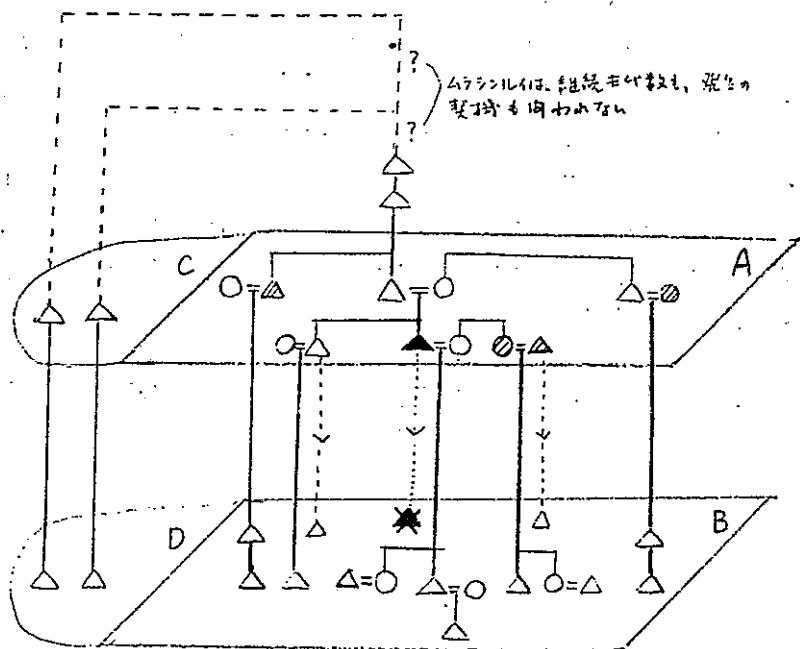
い〉者であるが、その裏方をつとめるのが〈ムラシンルイ〉である。〈血の道〉は、新しい親族・姻族をふやし、既にある関係をフルイ関係へと押しやり、結局は〈つきあい〉を切ってゆく。これとは対照的に、〈ムラシンルイ〉は、距離が一定で、〈つきあい〉も安定している。継続世代数も、発生の契機も問われずに、「エングミあったうち」として、均一化して〈つきあう〉のである。

問題が残るのは、なぜ〈ムラウチ〉のシンルイだけが固定化されるのか、という点である。今後、この点を明らかにするためには、〈ムラ〉の原理の解明が要請される。

注

- (1) 厳密に言えば、つきあいの場から消えるのは、あげ法事(33回忌又は50回忌)が終わって先祖様になってからである。

VI-1 図



▲: 糸子であり摘子

A: ▲の視座の時に登場する組の道の近い方の平面

B: ▲の野透りの時に登場する組の道の近い方の平面

C, D: ムラサキのつきあいの平面

△ 見参 また 見え見参で存在をしよう